

【論文】

『幸福な死』への挑戦

——カミュ最初の小説執筆の経緯と意義——

(上)

奈 蔵 正 之

虚偽を口にしない、それゆえ現実的ではない登場人物たち。彼らはこの世界の存在ではない。おそらくはそれゆえに、僕はこれまで、ふつうに理解されている意味での小説家ではなかったのだろう。そうではなくむしろ、自らの情熱や不安に応じた神話を紡ぎ出す芸術家なのだ。それゆえにまた、僕をこの世界にもたらせてくれた登場人物たちは、この神話における活力と独占の力を常に備えているのだ。(カミュ、『カルネ』)¹

序

第1部：挫折への経緯

第1章：前史：創作活動の開始

第2章：『幸福な死』の着想の経緯

第3章：『幸福な死』の構想の変遷

第4章：発表の断念と部分的な再生

第2部：模索したテーマ群

第1章：自伝的テーマとその変遷

第2章：愛の不可能性

第3章：幸福への試練

第4章：幸福という秘教

第5章：死と転生

結び

序

アルベール・カミュが作家としてデビューしたのは代表作『異邦人』*L'Étranger*によってであるが(1940年5月に執筆を完了し42年6月に出版)、これは彼が取り組んだ最初の小説作品ではなかつ

¹ 1950年に記された断章。『カルネ』第6分冊。PL.IV, pp.1090-91. (略号については後述)

本論文におけるカミュのテキストからの引用は、すべて拙訳による。また、訳文中における下線による強調は原文においてイタリックで強調されている箇所であり、波下線やゴチック体による強調は筆者が行ったものである。

た。1937年の中頃から1938年の3月頃にかけて、事実上の処女小説である『幸福な死』*La Mort heureuse*という作品の構想と執筆に、若き文学青年アルベール・カミュは集中していたのである²。作品は2部構成で、分量としては『異邦人』よりも若干長く、一応の完成を見ていた。しかしその出来映えに作者自身納得がいかなかったと思われ、また原稿を読んでもらった友人や恩師たちからの批評もはかばかしくなかったために、カミュはその出版を断念した³。とはいえ、文学的青春の貴重な証しとして愛着を覚えていたのであろう、その原稿を破棄することなく、カミュは生涯大切に保存しておいたのである。

作品の内容は、ほぼ次のようなものである。アルジェに住む青年パトリス・メルソーは、同居していた母親の死後、一人暮らしをしている。毎日貿易会社で事務作業に従事し、日曜日には窓から大通りの様子を眺めてぼんやりと一日を過ごすことが多い(第2章)。平凡極まる毎日であるが、彼の心の奥底には、そのような平凡を打ち破りたいという反抗の思いが潜んでいたのだ。ある日メルソーは、恋人のマルトと連れだって映画に行った際に、彼女の昔の男に気が付き、激しい嫉妬に駆られる。これが契機となって、過去に付き合った男の名前を全て教えるようにとマルトに迫るのだが、その中にロラン・ザグルーという下半身が不自由になってしまった資産家がいる、メルソーは興味を抱き、マルトから紹介してもらおう(第3章)。なぜかメルソーとザグルーは親しく会話を交わす間柄となり、ある日ザグルーは「人間にとってもっとも大切な行いは幸福の探求であり、そのためには膨大な時間が必要となる。その時間を購うためにまず蓄財をおこなったのだ」と自分の過去と幸福についての理念を語る。そして、体が自由にならなくなった自分に成り代わって、幸福の追求に赴くようにとメルソーに暗に促すのであった(第4章)。自宅に戻ったメルソーは、使っていない部屋を貸している樽職人のカルドナの様子がおかしいのでその部屋へ入ってみる。かなり前に母親に死なれ、同居していた姉にも去られたカルドナは、その日、ふいに孤独が耐えがたいものを感じられて号泣していたのだ。その有様を見ながら、メルソーは自らの日常が唾棄すべきものであると痛感し、ザグルーの示唆に従うことを決意する(第5章)。翌日メルソーは、ザグルーの邸を訪れ、彼が用意していた拳銃で、自殺を装う形で殺害すると、金庫に収められていた札束のほとんどをバッグに収めて、立ち去っていくのであった(第1章。時間軸を反転させて、あえてこの場面が小説の冒頭に置かれている)。ここまでが第1部である。

第2部は、アルジェを旅立ち、なぜかプラハに赴いたメルソーの姿で始まる。ホテルに部屋を取り、あてどなくプラハの街をさまようが、取り立てて目的があるわけでもなく、街の様子になじめず、精神状態も落ち着かない。ようやく行きつけのレストランを決めることができるが、ある晩そ

² それより以前の1935年頃に自らの幼少年期を題材にした「ルイ・ランジャール」*Louis Raingeard*という小説を書こうとカミュは考えていたが、ある程度の草稿を残すに留まった。この試みについては、第1部第1章で検討を行う。

³ すでにカミュは、友人であるエドモン・シャルロがアルジェで経営していた小出版社シャルロ書店からエッセイ集『裏と表』を出版していたから(1937年5月)、納得のいく作品であれば出版することは可能だったはずである。なおシャルロ書店からはその後、1939年にやはりエッセイ集の『婚礼』を出版している。

のレストランの前で殺害された死体に遭遇してしまい、精神的危機の極限にまで追い詰められる(第1章)。プラハを離れたメルソーは、チェコの平原を渡ってオーストリアへの鉄道旅を続ける。車窓から見える大地と大空を見つめているうちに、精神的な蘇生感を次第に覚えていく。ウィーンに着くと、手紙のやり取りをしていたチュニスの女子学生たちに手紙を書き、数日後に返事を受け取る。アルジェへに戻ることを決めたメルソーは、地中海を渡る船の上で、中央ヨーロッパにおける試練の旅を経て自分が生まれ変わったこと、自らは無垢であり、幸福の探求へ赴くべき存在としてこの世に誕生したのだという確信を抱く(第2章)。帰還したメルソーは、アルジェ湾を見晴らす町の高台に家を借り、「世界に向かう家」と名付けて、三人の女子学生と牧歌的な共同生活を営むことになる。ここで語られる(そして『幸福な死』の作品空間における)「世界」とは、広大に拡がる「実在」としての自然であり、そうした「世界」との精神的な感応という秘教的な営みによって「幸福」に近づいていくというのであった(第3章)。だがメルソーは、仲間たちに囲まれていてはおのれの目的を達成することはできず、幸福の探求を成就させるためには、孤独な生活を送る中で「世界」と自らとの一対一の差し向かいを維持しなければならないと考え、「世界に向かう家」を離れると、アルジェ郊外のシュヌーアに入手した一軒家に移り住む。他方で、リュシエンヌという不思議な女性と秘密裏に結婚し、しかし彼女はアルジェに住まわせたまま、「通わせ婚」のような形を取る。そしてシュヌーアの自然に包まれて、遂に自らが世界との「和合」を果たしたという実感を得るのであった(第4章)。毎年のように自然が移ろい、数年が経過する。ある年の秋、メルソーは病を得て床に就くが、体調がよくなったある晩、なぜか夜の海に泳ぎだし、「世界」との秘密の交流を行う。しかしその無理が原因となって高熱を発し、寝たきりとなる。熱にうなされながらメルソーは、ザグルーを殺害することでその男と自分が一体となったこと、ともに幸福の追求という困難な道のりを歩んできたことを理解する。そしてリュシエンヌに看取られながら、「幸福な死」を迎えるのであった。「石の中の石となり、メルソーは、心は喜びに包まれながら、動かぬ世界の真実へと戻っていった」(第5章)。

『幸福な死』は、主としてカミュのテクストの死後出版を扱う「カイエ・アルペール・カミュ」シリーズの第1巻として、1971年に出版された。一般の読者からは比較的好評であったものの、批評家や研究者たちは、若書きのこの小説に対して好意的な評価を寄せることはなかった。むしろ、旧プレイヤッド版カミュ作品集を校訂したロジェ・キヨが早くも1962年に評した言葉に賛意を呈したのである「見事に書かれてはいるが、不細工に継ぎ合わされている」⁴。また、『幸福な死』が「小説」と銘打たれ出版されたのは非常に問題であり、このテクストはあくまでも「資料」としてのみ扱うべきだと主張する研究者もいた。こうした風潮を背景にして、カミュに関しては膨大な数の研

⁴ ロジェ・キヨは、旧プレイヤッド版の校訂者であったため、当時まだ未刊行であったらカミュのさまざまな草稿資料やタイプ原稿にあたることができた。この言葉は、『異邦人』の注解の中で『幸福な死』の概要を紹介した際に用いられたものである。

究が著されているというのに、『幸福な死』を正面から扱った書籍は皆無であるのみならず、これを論じた雑誌論文すらほとんど見かけないのである。

確かに、いかにも若書きの作品らしい数多くの欠点が、『幸福な死』には横溢している。作品の構成は客観的な論理性に欠け、ストーリーの展開にも必然的な流れが乏しい。ザグラー殺害のくだりを除けば、作品の素材はほとんどがカミュの実体験に基づくものであり、それらが、「世界との合一を経て成就する幸福、およびその結果としての満たされた死」という夢想的なテーマとうまくかみ合っていない。主人公メルソーもほぼ若きカミュによる自画像に過ぎず、登場人物としての独立した存在感を備えているとは言いがたい。そして、随所に見受けられる難解な描写と文体は、芸術的な工夫の結実と言うよりも、作家の自己満足の結果という印象をもたらしている。

しかしながら、独立した作品としての評価と、作家研究にとっての価値とは、必ずしも一致するものではない。まず、作品の統一性を度外視してまで『幸福な死』に詰め込まれたさまざまなテーマは、それぞれが作家カミュにおいて極めて重要な存在である。幼少年期における家族の姿、(最初の結婚の失敗に起因する)恋愛に対する捻れた姿勢、幸福の探求、人間と自然との秘教的な一体化、自殺への傾斜、死の直前まで明晰な意識を貫こうとする意志、転生への願望、これらは1930年代後半における若きカミュが深く取り憑かれていたテーマであるが、そのほとんどは、明示的に、あるいは隠された形で、その後のカミュの作品の中に幾度も立ち現れ、また一部は、遺稿『最初の人間』の重要な素材ともなっていくのである。それゆえテーマ批評の観点からカミュの作品世界を分析しようとするならば、『幸福な死』のテキストを看過するのは大きな誤りであろう。

また、傑作『異邦人』をカミュが書き得たのは、その前に別の小説の挫折という経験を経ていたからだという事実にもっと着目する必要がある。彼が『異邦人』を完成させる力量を獲得したのは、『幸福な死』の執筆という苦闘を経る中で自らを鍛え上げたからに他ならない。それゆえ、作家カミュがいかにして誕生したかという秘密を探るためには、まず『幸福な死』を俎上に載せることが重要なのではないか。この作品を正面から取り上げた研究がほとんど見当たらないという現状には問題があるのではなからうか。

本論考は、こうしたカミュ研究における重大な欠落を埋めるために、二つの角度から『幸福な死』について論じる試みである。第1部においては、初期の習作からエッセイ集を経て、カミュがどのような経緯で小説の執筆を考えるようになり、『幸福な死』を着想したか、そしてその構想を具体的にどのように練って執筆に至ったかについて、主として『カルネ』の記事の分析に基づきながら、実証的に明らかにする。とりわけ、「『幸福な死』の構想は1936年にさかのぼる」という誤った説が今だに流布しているので、その誤りを明確に証明したい。

第2部においては、『幸福な死』のテキストそのものを素材とし、作中に含まれる数々の重要なテーマについて、それがどのような事情でカミュの内面に胚胎したのかという経緯を明らかにし、さらに作中における各テーマの具体的な意義について詳細な分析を施すことにする。(第2部は次号に掲載の予定)

第1部：挫折への道のり

はじめに

第1部においては、4つの時期に分けて『幸福な死』が形成される過程とその後について論考を行う。第1章は「前史」とし、『幸福な死』が着想される以前の若きカミュにおける創作活動を概観し、小説執筆を志すことになったきっかけを探る。第2章は、『カルネ』の断章を詳細に分析しながら1937年4月～9月初めの期間におけるカミュの文学的模索と、ついに『幸福な死』の初期の構想にまで至った過程を明らかにする。第3章においては、やはり『カルネ』の分析に基づきながら、初期の構想が変容を遂げて最終的な『幸福な死』の形が生み出されていくありさまを浮き彫りにする。最後に、カミュが『幸福な死』の発表を断念した経緯と、それが次の創作へとつながっていく様相を第4章において論じることとしたい⁵。

第1章：前史：創作活動の開始

1. 初期の習作群

多くの作家や詩人におけるのと同じように、カミュにおいても「ものを書く」という試みに手を染めたのは思春期の訪れに伴ってのことだった。1931年の17歳の頃から1934年の21歳の頃にかけて、若きカミュは、さまざま論説や詩、エッセイ、読書ノート、文学的断片、物語などを記している。これらカミュの初期習作は、まず1973年に出版された『カイエ・アルベール・カミュ第2巻』（以下、CAC2と略す）においてまとめられ、ついで2006年に刊行されたプレイヤッド版カミュ全集第1巻（以下、PLIと略す）に資料として収録された。この両者には若干の異同があるので、それがわかるような形で表としてまとめたのが次ページの【表1】である。

これらのうち生前に発表されたものは、リセの哲学クラスの学生たちが編集して発行していた『シュッド』誌 *Sud* と、アルジェ大学の学生新聞『アルジェ=エテュディアン』紙 *Alger-Étudiant* に

⁵ なお、引用文献の略号は次の通りとする。

PL.I : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I (1935–1944), Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2006. プレイヤッド版アルベール・カミュ全集第1巻。

PL.II : *Ibid.*, tome II (1944–1948), 2006. 同第2巻

PL.III : *Ibid.*, tome II (1944–1948), 2008. 同第4巻

PL.IV : *Ibid.*, tome IV (1957–1959), 2008. 同第4巻

PLT : Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1974. プレイヤッド版旧カミュ作品集：演劇、小説、短編小説篇（初版は1962年）

PLE : Albert Camus, *Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, 1977. プレイヤッド版旧カミュ作品集：エッセイ篇（初版は1965年）

CAC1 : *Cahiers Albert Camus 1 — La Mort heureuse —*, Gallimard, 1971.

CAC2 : *Cahiers Albert Camus 2 — Écrits de jeunesse d'Albert Camus —*, Gallimard, 1973.

CaI : *Carnets I*, mai 1935 - février 1942. Gallimard, 1962. 『カルネ』第1～第3分冊をまとめた単行本。

掲載されたもので⁶、前者のほとんどはいわば「文学的小論説」であり、後者は絵画批評が中心になっている。いずれも、いかにも才気にあふれた十代後半から二十代初めの若者の手になる文章といった趣で、文才のきらめきは垣間見られるものの、取り立てて注目すべき内容のものではない。

それに対して、死後に資料として公開されたテキスト類は、明らかに文学的創作を目指してさまざま試みを行った習作であり、それ自体としては作品的価値を持つものではないが、資料としては有用であり、早くもカミュの文体における特徴の萌芽や、その後のカミュ作品における重要なモチーフの芽生えが至る所で認められる。CAC2の校訂者ポール・ヴィヤラネーは、同書に収めた論考「最初のカミュ」«Le Premier Camus»でこの点について先駆的な検討を行い、次いでジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシがより深く徹底した分析を『アルベール・カミュ、あるいは作家の誕生』*Albert Camus ou la naissance d'un romancier*（後述）において遂行している。

【表1】

年代	タイトルなど	公開時期	PLI	CAC2	
1931	詩	シュッド	p.511	—	
	「死児の最後の日」	シュッド	p.512	—	
1932	「新しきヴェルレーヌ」	シュッド	p.514	p.131	
	「貧困の詩人、ジャン・リクテュス」	シュッド	p.517	p.137	
	「音楽に関する詩論」	シュッド	p.522	p.149	
	「今世紀の哲学」	シュッド	p.543	p.145	
	「演奏会」	アルジェ-E	p.547	—	
	「音楽。ラウール・デシャンについて」	アルジェ-E	p.548	—	
	「詩。クロード・ド・フレマンヴィル〈思春期〉」	アルジェ-E	p.554	—	
	「東洋趣味画家たちの展覧会」	アルジェ-E	p.554	—	
	「絵画。アスュス展」	アルジェ-E	p.557	—	
	「絵画。ピエール・ブシエル」	アルジェ-E	p.558	—	
	「アブド・エル・ティフ」	アルジェ-E	p.560	—	
	「直感」		死後公開	p.941	p.177
	「〈ベリア〉についてのマックス=ポール・フーシェに対する書き送り」		死後公開	p.953	—
	1933	「読書ノート」		死後公開	p.955
「調和における芸術」			死後公開	p.960	p.245
「ムーア人の家」			死後公開	p.967	p.207
「勇気」			死後公開	—	p.219
「地中海」			死後公開	p.976	p.223
「死んだ女を前にして」			死後公開	p.979	p.227
「愛した者の喪失」			死後公開	p.982	p.231
「生きることを受け入れる…」			死後公開	p.985	—
「神とその魂との対話」			死後公開	p.986	p.235
「諸矛盾」			死後公開	—	p.239
「貧しい地区の病院」			死後公開	p.73	p.241
1934	「メリュジーヌの本」		死後公開	p.988	p.257
	「貧しい地区の声」		死後公開	p.75	p.271

⁶ 表中の「アルジェ-E」とは、『アルジェ=エテュディアン』の略である。

これら習作群のうち、若きカミュにおける小説への歩みを探る上で最も重要となる資料が、「貧しい地区の声」« Les Voix du quartiers pauvre »であろう。これは自らの生い立ちに基づいた4つのエピソードを描き出したものであり、ノートに清書したその原稿を、カミュは1934年のクリスマスに、結婚したばかりだった若妻シモーヌにプレゼントとして捧げている⁷。それゆえ本来極めて個人的なテキストであり、自分の内的世界や生い立ちを愛する妻に知ってもらおうという思いからしたためたものであろう。だがそうした事情ゆえに、「貧しい地区の声」の執筆は、当時のカミュが自らの内面を深く掘り下げる経緯となり、そこで表出された内容が、その後何度も繰り返し語られることになるのである。

この若書きの作品は、カミュの家族を題材にして、それぞれの人物にまつわるエピソードや彼らとカミュ自身との関わりを、4つの「声」という形で描き出している。ロットマンやトッドの評伝に記されたことと照合すると、1と3はかなりリアルに実際の出来事を反映しているが、2と4には多分に小説的な潤色が施されている。そしてラストに短い省察が置かれている。そしてこのあと述べるように、これらのテキストのほとんどは、「ルイ・ランジャール」の草稿を経て、1937年に出版されたエッセイ集『裏と表』*L'Envers et l'endroit*において再利用されることになるのである。

- 1 「ものを考えない女の声」：カミュが幼い頃の母親の姿を描写。(PLI, pp.76-78)
- 2 「死ぬために生まれてきた男の声」：自慢話を誰からも聞いてもらえなくなった老人が、路上で孤独死を迎える。(部分的に義理の叔父アコーに関わるが、年齢のことが大きくデフォルメされている)(pp.78-80)
- 3 「音楽によってかきたてられた声」：母親に恋人ができたことが原因で、その弟(カミュの叔父)との間に起こった諍いのエピソード。(pp.80-82)
- 4 「家族が映画へ行くので取り残される病気の老婆の声」：晩年の祖母の姿に基づく。(祖母はカミュの少年期に亡くなっているが、ここでは彼をモデルとした人物は「青年」として登場している)(pp.83-85)
- 5 末尾の省察 (pp.85-86)

おそらく、妻シモーヌのために「貧しい地区の声」を書いたことがきっかけとなって、カミュは自らの幼少期の思い出を文学的テーマとして扱おうと積極的に考えるようになったのではあるまいか。そしてそのテーマを小説に結びつけたいという思いが彼の中に芽生えるのである。

2. 「ルイ・ランジャール」の試み

カミュ研究の泰斗ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシは、独自に未公開草稿類に当たった結果、

⁷ カミュは、まだ学生時代だった1934年6月にシモーヌ・イエと結婚した。「貧しい地区の声」の前にも、「メリュジーヌの本」« Le Livre de Mélusine »という大人のためのお伽噺を書いて、シモーヌに捧げている。シモーヌは、若き文学青年カミュにとって、創作のためのミューズだった。少なくとも、カミュはそう思い込もうとしていた。

実は1935年頃に若きカミュが小説を書こうという試みに取り組んでいたことを明らかにした。これは完成作とはほど遠いものでゆえに「処女小説」とは呼べず、分量もさほど多くない、下書きにすぎない原稿である。だが、カミュの作家としての自己形成における出発点として、重要な意義を孕んでいるのである。

原稿にはタイトルが付されていないために、レヴィ=ヴァランシは主人公の名前を採って「ルイ・ランジャール」« Louis Raingeard »と名付け⁸、自身の国家博士論文『アルベール・カミュの小説作品の起源』*Genèse de l'œuvre romanesque d'Albert Camus*において詳細な分析を行った。博士論文にしては珍しく、この大作研究は出版されることがなかったが⁹、レヴィ=ヴァランシの死後、アグネス・スピーケルの手によって、『アルベール・カミュ、あるいは作家の誕生』と題されて、2006年になりようやく刊行された¹⁰。他方、レヴィ=ヴァランシは新プレイヤッド版カミュ全集編纂の中心人物でもあり、カミュの草稿の中から「ルイ・ランジャール」に関わると考えられるテキストをまとめあげ、「ルイ・ランジャール」再構成 [Louis Raingeard. Reconstitution] というタイトルで、PLIに収録したのである¹¹。

カミュは『カルネ』のノートを1935年5月から記し始めているが¹²、記念すべきその最初の断章が明らかに「ルイ」の執筆意図と目標についてのものであることが印象深い¹³。

【断章 1-001】 (1935年5月) (PLII, pp.795-76)

僕が語りたこと。

ロマン的な思いはなくとも、失われた貧しさに対してノスタルジーを抱くことができる。ある程度の年月貧しさのうちに暮らただけで、一種の感受性が形成されるのだ。そうした特別の場合には、息子が母

⁸ カミュの原稿の中では「ランガール Raingard」と記されている。最終的に「ルイ・ランジャール」をタイトルとして採用する以前は、レヴィ=ヴァランシ氏も「ルイ・ランガール」と呼んでおり、筆者は、氏がそのように発音するのを個人的に耳にしたことがある。インターネットを用いて調査したところ、フランス国内に「ランジャール」という姓はかなり認められるが、「ランガール」は存在しない。それゆえ、「ランガール」としたのはカミュの誤記であると判断して、レヴィ=ヴァランシは「ランジャール」としたのであるだろうか？

⁹ スピーケルはレヴィ=ヴァランシの多忙をその理由にしているが、どうやら未発表の原稿を研究材料に用いたために、著作権の問題が絡んだらしい。

¹⁰ ガリマール社。原書で500ページを優に超える大作である。

¹¹ 独立した作品としてではなく、エッセイ集『裏と表』の付属資料Appendiceとして収められている。

¹² 1935年から死の直前まで、カミュは計9冊のノートに書き込みを行っていた。その内容は自己省察、読書ノート、身辺雑記、作品の計画、作品に使うためのテキストの断片、時には純然たる日記、というふうさまざまな性格を持ち、毎日のように書き込まれた時期もあれば、数ヶ月何も記されなかった時期もある。これらのノートが作家の死後に出版されるに際して『カルネ』*Carnets*というタイトルが付けられた。『カルネ』を通じて形成過程がよく追える作品もあれば、『カルネ』があまり役に立たない作品もある。『幸福な死』に関しては、この後見るように、『カルネ』における記載が極めて豊富である。

『カルネ』に記されているひとつかたまりの文章のことを「断章」と呼ぶことにする。原書では断章ごとの番号は振られておらず、これでは扱うのに不便であるため、筆者は独自に通し番号を付した。例えば「1-001」といったナンバリングは、「第1分冊の1番目の断章」という意味になる。

¹³ しかし、なぜかその後の『カルネ』には「ルイ」に関わる言及がまったく認められない。

親に対して抱く一風変わった感情から、その感受性の全てが作り出される¹⁴。実にさまざまな領域でこの感受性を明らかに示すというのは、子供時代についての、隠された、物質的な記憶によって十分に納得のいくことなのだ（それは、魂にこびりついた膠（にかわ）のようなものだ）。

[...] 作品とは告白なのだ。僕は証言しなければならない。語りたいこと、しっかりと目にしたいことは一つだけなのだ。あの貧しさの内での暮らしにおいてこそ、あの控えめな、あるいは自惚れの強い人たちの間でこそ、生きることの本当の意味と思われるものに、僕はもっとも確かな形で触れたのだ。芸術作品だけでは決して生きることの本当の意味に達することはできない。芸術は僕にとって全てではないのだ。だが少なくとも一つの手段にはなってほしいものだ。

[...] 全てが、母親と息子という媒介を通じて表現される必要がある。

そのことが全般に及ばなければならない。

正確に述べれば、全てが複雑に絡み合うのだ。

- 1) 舞台背景。暮らした地区とその住人たち。
- 2) 母親とその行い。
- 3) 息子の、母親との関係。

最終的にはどのように解決されるか。母親？ 最終章：息子のノスタルジーによって実現される象徴的な価値？？？

こうして、「貧しい地区の声」を出発点としつつそれを発展させ、自らの貧しかった幼少年期の体験を元に、母親との関係性の意味を問うことを中心に据えつつ、祖母や叔父などの家族の姿も描き出そうという、若きカミュの意図が明らかになる。また、純然たるフィクションを目指すことは彼の脳裏にはなく、小説創作という行為を「証言」として機能させるという目標を抱いていたのだ。

旧プレイヤッド版において編纂の中心となったロジェ・キヨは、カミュが1935年頃に小説の制作に取り組もうとしていたことに気が付かなかったため、「ルイ・ランジャール」に関連する草稿類について、エッセイ集『裏と表』に関連する資料だと考えて（カミュは「ルイ」からかなり多くのテキストを『裏と表』に流用しているのです、そのように判断したのは無理もないかもしれない）、プレイヤッド旧版では『エッセイ篇』における『裏と表』の注解や補遺の部分に掲載してしまった。そして「1935年頃カミュはそのエッセイを母親のテーマのもとにまとめようと考えていたのはほぼ確実である」と述べて、明らかに「ルイ」の構想である2つのメモを『裏と表』のプランであると紹介している¹⁵。

¹⁴ 下線部は、原文においてイタリック。

¹⁵ PLE, pp.1176-77. 「章 chapitre」という用語が用いられているからには、エッセイではなく小説に関わることは明白である。また、この資料は残念ながら新プレイヤッド版全集に再録されていない。なおキヨは「プラン1とプラン2のどちらが先のことなのか不明である」と記している。

[プラン1]

第1章：(病の)発作の状況

第2章：その女が息子と差し向かいになるに至る，ゆっくりとした家族の崩壊 / 祖母の死 / 息子の病気 / 息子との別れ

第3章：二つの事柄から閉め出された息子における，隠された体験 /

1. 同じ階に住む老婆を見棄てる / 老いた叔父の死 / 町の反対側に別れ別れになって孤独になる。時々顔を合わせる。二つの無限大
2. 母親と息子 / 理解の最初の段階 / 手の施しようがない魅力
3. 最終的な引きこもり / 試しに戻ってみる，1週間 / 象徴。老婆，老人 / 家を出る

[プラン2]

第1部：老いた人々 第1章：母親と息子 / 第2章：貧しい地区 / 第3章：不条理

第2部：ある暮らしの再発見

第3部 第1章：母親とともに / 第2章：世界。僕の芝居が役に立つ。

これに対して，レヴィ=ヴァランシが再構成したテキストは【表2】のような内容になっており，さまざまな内容のエピソードが，あまり相互の関連がなく連なっている。便宜のためにエピソードごとに番号を振ることにし，上記 [プラン1] との関わりも記すことにしよう。なお，エピソード8~10については，レヴィ=ヴァランシは「[ルイ・ランジャール]に関連する断片」という位置づけを行っているが，ここでは一連のエピソードとして扱うことにする。また，ページは全てPLIである¹⁶。

【表2】

	ページ	概要	プラン1
1	p.86, pp.44-46	家族の構成 (5人家族)，祖母の思い出，祖母の病気と死	2
2	pp.86-88	結核に倒れた主人公，結核療養所の光景，家族が迎えに来る	1, 2
3	pp.88-90	同居していた叔父(母親の弟)の物語，母親と叔父の諍い，一人暮らしになった叔父	3-1 ?
4	p.90 pp.41-4	もう一人の叔父の物語→老人という設定。老人の自慢話。それが聞いてもらえなくなる。路上での老人の孤独な死。←「貧しい地区の声」のエピソード2を利用	3-1

¹⁶ 次節に見るように，「ルイ・ランジャール」のテキストのかなりのものが，後に『裏と表』所収の「皮肉」と「ウイとノンの間」にそのまま利用されている。また逆に「貧しい地区の声」の文章をそのまま「ルイ」に利用した部分もある。プレイヤード版においては，ページ数削減のためか，引用したあるいは引用された部分については「貧しい地区の声」あるいは『裏と表』の該当ページを読むようにという編集が行われている。【表2】において2種類のページ数が示されている部分があるのは，そのためである。この実に不可解な編集方針が原因となり，プレイヤード版で「ルイ・ランジャール」の原稿を通して読むことが難しくなっている。

5	p.90 pp.39-41	同じ階に住む老婆。関心を示す青年。しかし老婆の一家とその青年は、老婆を残して映画へ行ってしまう。残された老婆の孤独。←「声」のエピソード4を利用	3-1
6	p.90 pp.75-78	主人公が想起する母親の思い出。幼い頃のありさま。←「声」のエピソード3を利用	3-2
7	pp.90-93 pp.50-51	主人公と母親との精神的な関わり。母親が暴漢に襲われ、一晚その看病をおこなったこと。主人公が結核で倒れたときに示した母親の不思議な態度。	
8	pp.93-94	母親が、恋人との逢瀬を弟（主人公の叔父）に邪魔され、諍いが起こる。離れて暮らしていた子供たちの所へ来て、その話を泣きながらする母親←「声」のエピソード4を利用	
9	pp.94-95 pp.85-86	老いと人生に関する省察。老人のせりふ。	
10	pp.95-96	主人公が（恐らく心の中で）母親に語りかけることば	

このように、さまざまなエピソードが羅列されているものの、一貫したストーリーの展開や全体の構成というものは認めらず、むしろ幼少年期の思い出に基づいた叙情的なエッセイという様相を見せている。レヴィ=ヴァランシが発掘した「ルイ・ランジャール」の原稿は、確かに貴重な資料ではあるが、決して「小説」と呼ぶべきではなく、下書きというレベルのものに過ぎない。このような不完全なテキストしか残されていないからには、「ルイ」の執筆はかなり早い段階で放棄されたのであろう。若きカミュは、断章1-001で大いなる意図を披瀝したものの、小説を書くというスキルそのもの、つまりいかにして首尾一貫した虚構の枠組みを構築するかという術が我が手にできず、壁にぶつかったのだと考えられる。それゆえ、作家カミュの誕生の秘密を「ルイ・ランジャール」の中に探るのはかなり無理があり、そうした探求はむしろ『幸福な死』において試みるべきなのである。

3. テキストの相互関連性

とはいえ、「ルイ・ランジャール」で描き出したかった幼く貧しい時代の想起というテーマは、カミュにとって根源的なものの一つであり、『異邦人』以降は影を潜めるものの決して忘却されることはなく、遂には『最初の人間』において柱の一つを形成することになり、遺された草稿のほとんどは幼少年期の思い出の再生に充てられている。ところで、このテーマについて最も早く書かれたのが【表1】にある「勇気」«Le Courage»と題された短い断片であり¹⁷、家族の構成と祖母の思い出に関する「ルイ・ランジャール」のエピソード1は、「勇気」のテキストをわずかに書き直したものに過ぎない。おそらく「勇気」こそが生き立ちと家族のテーマについての真の源流だったのであろう。

¹⁷ このテキストは、なぜかPLIには再録されていない。

「勇気」(CAC2, p.219)

その家族は五人で暮らしていた。祖母と、下の息子と、その姉と、姉の二人の子供である。下の息子のほうはほとんど口が利けなかった。姉の方は、体が不自由で、うまく考えをまとめることができなかった。孫のうち一人はもう保険会社に勤めている一方で、下の息子は学業を続けている。70に手が届いているのに、祖母はこの一家に君臨していた。 [...]

祖母の明るい目のせいで、思い出すと顔が赤らむ思い出を下の孫は抱くことになった。 [...] 祖母は同じように、愛情とは人に強要するものだと考えていた。 [...] 祖母はまた、肝臓を患っていたために辛い嘔吐が起こって苦しんでいた。けれども、病気の発作に対していかなる慎み深さも示そうとはしなかった。 [...]

「ルイ・ランジャール」(PLI, p.44-45)

[...] その家族は五人で暮らしていた。祖母と、下の息子と、その姉と、姉の二人の子供である。下の息子のほうはほとんど口が利けなかった。姉の方は、体が不自由で、うまく考えをまとめることができなかった。孫のうち一人はもう保険会社に勤めており、下の息子は学業を続けている。70に手が届いているのに、祖母はこの一家に君臨していた。 [...]

祖母の明るい目のせいで、思い出すと顔が赤らむ思い出を下の孫は抱くことになった。 [...] 祖母は同じように、愛情とは人に強要するものだと考えていた。 [...] 祖母はまた、肝臓を患っていたために辛い嘔吐が起こって苦しんでいた。けれども、病気の発作に対していかなる慎み深さも示そうとはしなかった。 [...]

「ルイ・ランジャール」の完成を断念したカミュは、しかしその素材や書かれたテキストそのものへの愛着を捨てることができず、かなりの部分を、『裏と表』所収のエッセイ「皮肉」« L'Ironie »と「ウイとノンの間」« Entre oui et non » にそのまま利用することにした。そして「勇気」のテキストは、「ルイ」を経由して「皮肉」にまで受け継がれることになったのである。

他方、「貧しい地区の声」の4つのテキストの全てが、若干の修正を施した上で「ルイ・ランジャール」に取り込まれており、さらにエピソード3を除いた3つのテキストが「ルイ」を経由して『裏と表』に収められた「皮肉」と「ウイとノンの間」の素材として全面的に利用されているのである。このようなカミュの生い立ちを巡るテキストの相互関連を、ルイを中心にして一覧にまとめると【表3】のようになる。

【表3】

「勇気」	「貧しい地区の声」	「ルイ」	『裏と表』
テキスト全体		→ エピソード1	→ 「皮肉」 PLI, pp.44-46
		エピソード2	
		エピソード3	
	エピソード2	→ エピソード4	→ 「皮肉」 pp.41-44
	エピソード4	→ エピソード5	→ 「皮肉」 pp.39-41
	エピソード1	→ エピソード6	→ 「ウイとノンの間」 pp.47-50
		エピソード7	→ 「ウイとノンの間」 pp.50-51
	エピソード3	→ エピソード8	
	省察	→ エピソード9	→ 「皮肉」 pp.43-44
		エピソード10	

とりわけ「皮肉」は、事実上、〈「貧しい地区の声」のエピソード4（「ルイ」の5）+エピソード2（「ルイ」の4）+省察（「ルイ」の9）+「ルイ」のエピソード1〉という順序でテキストを並べ替えたものに過ぎない。

また、「ウイとノンの間」の前半は、「貧しい地区の声」エピソード1「ものを考えない女の声」の後に「ルイ・ランジャール」のエピソード7を組み合わせて構成されている（後半は新たに書き加えられた内容である）

「貧しい地区の声」(PLI, pp.75-76)

それはまず、考えることをしない女の人の声だ。語らなければならないものがあるとしたら、それは思い出ではなく、呼び声だ。その中で、過ぎ去った過去も、虚しい慰めも、求めようとするわけではない。けれども、忘却の底から僕たちのところへ立ち戻ってくるあの時間のうちでとりわけ保たれているのは、混じりけのない感動や永遠の瞬間についての無傷な思い出であり、僕たちはその一部だったのだ。僕たちにおいて、そのことだけが真実なのだ。そうだとわかった時には、いつももう遅い。そのような時間、そのような日々にあって、僕たちは愛を抱いた。あるしぐさをしようと体をたわめることで、景色の中の木のように機会を捉えて、気持ちを交わしたのだ。そしてこうした愛をみなもう一度いただくためには、たったひとつの些細なことがらでよく、それだけで充分なのだ。長いこと締め切られてきた部屋の匂い、道に響く他とは違った足音。自分たちを与えることで愛し合い、そして自分たち自身となったのだ。自らへと戻してくれる愛以外の愛などないのだから。

「ウイとノンの間」(PLI, p.47)

もし本当に、楽園というものがあるとすればそれは失われた楽園以外にはないというのなら、いま自分の中に腰を下ろしている優しくもあり非人間的でもあるこの何かをどのように名付けたらよいか、僕にはわかる。放浪していた者が故郷へと戻ってきたのだ。[...] 忘却の底から僕たちのところへ立ち戻ってくるあの時間のうちでとりわけ保たれているのは、混じりけのない感動や永遠の瞬間についての無傷な思い出であり、僕たちはその一部だったのだ。僕たちにおいて、そのことだけが真実なのだ。そうだとわかった時には、いつももう遅い。あるしぐさをしようと体をたわめることや、景色の中の木のように機会を捉えてることを僕たちは好むのだ。そしてこうした愛をみなもう一度いただくためには、たったひとつの些細なことがらでよく、それだけで充分なのだ。長いこと締め切られてきた部屋の匂い、道に響く他とは違った足音。僕についても同じことだ。自らを与えることで愛を抱き、そしてそして自分自身となったのだ。自らへと戻してくれる愛以外の愛などないのだから。

こうして、「勇気」を書いたことから始まった「幼少年期のテーマのテキスト化」は、「貧しい地区の声」と「ルイ・ランジャール」を経て、『裏と表』に収められた2篇のエッセイという形であろうやく日の目をみたわけである。その意味でエッセイ集『裏と表』は、「ルイ・ランジャール」の試みに失敗したカミュが、その代替行為として世に問えるものを目指した、という一面もあるのではなからうか。

【表2】と【表3】を比べると、「ルイ・ランジャール」で描かれながら『裏と表』のエッセイとして引き継がれなかったエピソードには3種類あることがわかる。エピソード2と7における、主人公の結核発病に関わる事柄と¹⁸、エピソード10における母親への直接の語りかけについては、「ル

¹⁸ なお、エピソード2は【表1】にある「貧しい地区の病院」が原型になっているが、これについては第2部第1章で言及を行う。

イ・ランジャール」の中にカミュは堅く封印することになる。この後カミュは生涯、自己の結核体験について直接書き記すことはなく、母親に直接語りかけるようなテキストを書くこともなかったのである。むしろ、仮に『最初の人間』が完成していれば、少年時における発病について語らなければならなかったであろうし、母親に直接呼びかけるような内容も含まれていた可能性があるが¹⁹。そして同居していた叔父について語られたエピソード2とエピソード8は、『幸福な死』の第1部第5章で利用されることになるのである²⁰。

4. 『裏と表』の形成

カミュが著した最初の書籍である『裏と表』は、1937年5月にアルジェリアの小さな書店兼出版社であるシャルロ書店から出版された²¹。上記「皮肉」「ウイとノンの間」に加えて、カミュは3篇のエッセイを執筆し、計5篇からなるエッセイ集とした。「魂の中の死」は1936年9月以降でなければ執筆できないから、全体の原稿がまとまったのは1936年の末頃のことであろう。

「魂の中の死」*« La Mort dans l'âme »*: 1936年夏の中央ヨーロッパ旅行の際にプラハで体験したパニックと、その後帰国する際にイタリアで覚えた精神的蘇生感を題材にしている。この題材は、後に『幸福な死』第2部第1章と第2章でさらに追求されることになる。

「生きることへの愛」*« L'Amour de vivre »*: 1935年の夏の終わりに、バレアレス諸島に滞在していた妻シモーヌに合流した際の体験を題材にしている。

「裏と表」*« L'Envers et l'endroit »*: 1936年1月の日付がある『カルネ』の断章1-010に加筆して作成。「世界」と自己との間における神秘的な関係が描写されている。

「皮肉」は、祖母にまつわる2つのエピソードと、恐らく義理の叔父アコーからヒントを得ながらも大きくデフォルメした老人についての話で構成され²²、老いがもたらす悲惨と、それに対する語り手の、まさに「皮肉」な考察が淡々と語られている。それに対して「ウイとノンの間」では母親がテーマになっており、アラブ人が営むカフェに腰を下ろした語り手が、子供時代の母親の姿、暴漢に襲われた母親を看病したこと、自分が青年になってからの母親との会話、などを次々と思い出していき、その合間に自殺に関する考察や、「すべてと、自分自身に対する、澄み切ったそして根源的な無関心」などを語る。

「魂の中の死」は、プラハに旅したカミュが陥った精神的な危機と、イタリアを經由して帰国す

¹⁹ そもそも、遺された『最初の人間』の原稿の冒頭に母親への献辞が記されている。もっとも、文字がほとんど読めなかったカミュの母親は、決して彼の作品を読むことはできなかったのであるが。

²⁰ これら3点については、第2部第1章で詳しく検討する。

²¹ 店主のエドモン・シャルロはカミュの友人であった。発行部数はわずかに300部であり、1958年に新たな序文を付して再刊されるまでは『裏と表』は「幻の著作物」となっていた。

²² カミュは十代の頃に結核が発病した後、一時期叔父ギユスターヴ・アコーの家で療養生活を送らせてもらった。その当時のアコーは壮年期の働き盛りであり、老人とはほど遠い人物であった。

るさなかに覚えた内的な蘇生感を語っている。とりわけ前半のプラハの部分は、初期のカミュが著したものの中でも最も悲痛なテキストであろう。

僕は、人気がなく静まり返った、巨大なフラドチャニ地区で、異様な時間を過ごした。日差しが傾く頃、その大聖堂と建物の影を受けて、僕の孤独な足音が通りに響いていた。それに気が付くたびに、またパニックに襲われたのだ。[...]

そして、今なら語ることができる。プラハについて僕の中に残っているのは、酢に浸けたキュウリのあの匂いなのだ。通りの角と言う角で酢漬けキュウ리를売っており、客は親指でつまんで食べるのだ。ホテルのドアを開けて表に出るや否や、その酸っぱく鼻をつく香りが、僕の不安を呼び覚まし、それをかき立てたのだ。そのことと、そしてたぶん、アコーディオンの、あるメロディーのこともある。[...]

僕はいまだに覚えている。ヴルタヴァ川のほとりで突然立ち止まり、あの匂いとあのメロディーにつかまえられ、自分自身の限界へと投げ出され、とても小さな声でつぶやいたのだ。「これはなんの意味なんだ、これはなんの意味なんだ？」²³

旅先でカミュがどうしてこのような抑鬱状態に陥ったのかが、長く謎であった。その理由を明らかにしたのは、1979年に膨大な調査に基づいて浩瀚なカミュの評伝を著したハーバート・R・ロットマンである。1936年の8月、友人のイヴ・ブルジョワに誘われて、カミュと妻シモーヌは中央ヨーロッパの旅に出たのであるが、局留めの郵便をザルツブルクで受け取った際に妻宛の手紙を開封してしまい、その文面から、彼女がある医師と道ならぬ関係にあるとカミュは確信したのである²⁴。夫妻の間で激しい争いが生じたが、友人のためもあってか、カミュは予定通り旅を続けることにする。しかし内心の懊悩を無理に抑圧することで、彼は精神的なエネルギーを使い果たしたのであろう。一人で先にプラハに着き数日を過ごすことになったのだが、そのプラハで完全にパニック状態に陥ってしまったのである²⁵。

カミュはこの体験をテキスト化し外的に表出することで内面の修復を図ろうと試み、それがエッセイとして結実したのであろう。しかしそれだけでは充分でなく、『幸福な死』においてプラハでの体験を重要な素材として再び取り上げ、第2部第1章においてメルソーを「プラハの地獄」へと旅立たせることになるのである。また後年、『誤解』を執筆する際に当初はその舞台を（プラハを訪れる直前に立ち寄っていた）ブジェヨヴィツェに据えたのも、チェコの土地に対する個人的なサンチマンが背景にあったからである。

「生きることへの愛」の舞台は、バレアレス諸島のマヨルカ島にある町パルマであり、1935年の夏頃、さまざまな事情で妻シモーヌがマヨルカ島に滞在していて、カミュは妻と合流しにそこへ赴

²³ PLL, p.57, p.58. なお、フラドチャニは、プラハにある歴史的旧市街の一つである。

²⁴ Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, Widenfeld & Nicolson (London), 1979 (以下、ロットマン(英)と略す)、第9章。この伝記は、マリアンヌ・ヴェロンによるフランス語訳され、原書の英語版に先駆けてフランスで出版された。Seuil, 1978 (以下、ロットマン(仏)と略す)

²⁵ また、投宿した宿で死人が出るという事件にも遭遇してしまった。

いたのである。1936年1月から2月に記されたと考えられる『カルネ』の断章1-013がこのエッセイの原型になっており、また続く1-014にはマヨルカで訪れた場所の一覧が記されている²⁶。

断章1-013 (PLII, p.800)

旅の値打ちを作り出すもの、それは不安である。というのも、ある瞬間、自分の国からも、自分の言語からもはるか遠く離れて ([...]), ほんやりとした不安にとらわれ、昔なじみの習わしに逃げ込みたいという本能的な思いが生じるからだ。それが、旅がもたらしてくれる最も明らかなことなのである。

「生きることへの愛」(PLI, pp.65-66)

[...] 旅の値打ちを作り出すもの、それは不安である。旅は、我々の中にある一種の内的な飾り付けを打ち砕いてくれるのだ。[...] 自分の親しい人たちからも、自分の言語からも遠く離れて、支えてくれるものから引き離され、身につけた仮面も引きはがされて、我々のなにもかもが見かけ通りの姿に戻ってしまうのだ。

「魂の中の死」においては、旅先での不安がパニックをもたらし様が描き出されていたが、「生きることへの愛」では、旅がもたらし不安の肯定的な面が強調され、自らの本質と差し向かいになる契機となると述べられている。そしてパルマのカフェで巨大な女性の踊りに驚愕したり、修道院を訪れたりしながら、語り手はつぶやくのである「生きることに絶望することなくして、生きることを愛することもない」。

素材となった旅の時間軸（1935年のマヨルカ、36年のプラハ）とは逆にして、「魂の中の死」、「生きることへの愛」という順番にカミュがエッセイを並べたのは、暗鬱な内容の作品の後に肯定的な内容のテキストを配置することで、精神的な蘇生の方向性をエッセイ集の組み立てにおいても盛り込みたかったからであろう。

『裏と表』の末尾に来るのは、全体のタイトルと同じ名称を冠された「裏と表」という短いエッセイである。このテキストの後半には、「1936年1月」という日付が記された、『カルネ』の断章1-10が全面的に用いられている。

断章1-010 (PLII, p.799)

僕がまだある種の不安にとらわれているのは、手に触ることができないこの瞬間というものが水銀の玉を思わせるように指の間をすり抜けているのを感じているからだ。だから、世界に背を向けたいと思っている連中のことなど放っておこう。僕はもう不満を漏らしたりはしない。自分が生まれてくるのを目にしているからだ。この世界で幸福なのだ。僕の王国はこの世界だからだ。[...] 大切なのは、真実であることだ。そうすれば、そこに全てが書き込まれる。人間であることも、単純であることも。そして、自分が世界である時ほど、僕が真実であり透き通っている時が他にあるだろうか？

「裏と表」(PLI, pp.65-66)

僕がまだある種の不安にとらわれているのは、手に触ることができないこの瞬間というものが水銀の玉を思わせるように指の間をすり抜けているのを感じているからだ。だから、世界に背を向けたいと思っている連中のことなど放っておこう。僕はもう不満を漏らしたりはしない。自分が生まれてくるのを目にしているからだ。今この時、僕の全王国はこの世界なのだ。[...] 大切なのは、真実であることだ。そうすれば、そこに全てが書き込まれる。人間であることも、単純であることも。では、自分が世界である時ほど、僕が真実であり透き通っている時が他にあるだろうか？

²⁶ 第2章で見ると、『カルネ』第1分冊については書かれた時期の特定に困難や疑問が生じる断章が散見される。ただし、この2つの断章が記された時期に関しては問題がないと考えられる。

カミュには、l'indifférence, l'espoir, la révolte などある種の単語に、特別な、個人的な意味合いを持たせ、それをキーワードとして用いるという傾向があり、それは初期のテキストにおいて顕著である。中でも「世界 le monde」という単語には強いこだわりを見せ、人間世界という社会的な意味を取りのけ、自然世界という意味に限定した上で、その「世界」を、擬人化できるほどの一つの「実在」として描き出そうとした。そのような意味内容、すなわち「シニフィエ」のみならず、「le monde」という音の響き、つまり「シニフィアン」自体にもカミュは深い愛着を覚えていたように思われる。そして、語り手、小説の登場人物、主人公、つまりは作者自身が、そうしたカミュの意味での「世界」と秘教的な合一を果たすというのが、初期の彼における中心的なテーマの一つだったのである。

断章1-10およびエッセイ「裏と表」のテキストは、そのような形で「世界」という単語が徹底的に用いられた最初のものである。そしてこのテーマは、後に『幸福な死』における幸福の追求の問題と深く絡み合い、この作品の第二部において全面的に追求されるのであった。

第2章：『幸福な死』の着想の過程

1. 模索の時期

「ルイ・ランジャール」を断念した後、カミュはしばらく小説のことは念頭に置かなくなる。その代わりに自らの創造的エネルギーを注いだのは、『裏と表』に収録されたエッセイを除けば、主に演劇であった。1936年の1月、素人劇団〈労働座〉を結成し、翌37年の前半にかけて活動を行うのである。彼は劇団の主催、脚本の執筆、演出などをこなし、自らも主要な役で舞台に立った。さらに、気のあった仲間たちとともに行う共同活動の熱気が若きカミュにとって得がたい宝となった。作家が生涯にわたって抱き続ける演劇への情熱は、この時期に端を発するのである。36年から37年にかけて行われた演劇活動をまとめると次のようになる。

1936年

1月：マルローの小説『侮蔑の時代』を翻案して上演

2月：『アストゥリアスの反乱』を共同執筆するが、3月にアルジェ市長より上演禁止の命令を受けたため、その脚本を5月にアルジェのシャルロ書店から出版

11月：ゴーリキー『どん底』を上演

12月：ラモン・センデルの『秘密』を上演²⁷

1937年

3月：アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』を上演

ジョンソンの『寡黙な女』を上演

²⁷ なお1936年3～5月の時期は、アルジェ大学に提出する学位論文の作成に集中していたと思われる。その論文「キリスト教形而上学と新プラトン主義」に対し、5月下旬、高等教育修了証書を授与された。

また、〈労働座〉は1937年9月頃、〈仲間座〉という名称で衣替えを行うことになる。

プーシキンの『ドン・ジュアン』を上演
4月：ジョルジュ・クートリヌの『第330条』を上演
『スペイン、34年』（『アストゥリアスの反乱』の縮小版）を上演

こうした事情から、『カルネ』において小説執筆についてのメモが明らかに現れるのは、実は1937年4月になってからのことなのである。この時期に記された断章1-065の後半に当時のカミュが今後取り組みたいと考えていた事柄が列挙されていて、その中に「小説 roman」ということばが明確に認められる²⁸。

【断章 1-065】（1937年4月）（PLII, pp.814-15）

- 1) 遺跡に関するエッセイ：遺跡の中を吹く風、あるいは日に照らされた死
- 2) 「魂の中の死」をもう一度取り上げる。
- 3) 世界に向かう家
- 4) 小説—それに取り組むこと
- 5) マルローに関するエッセイ
- 6) 論文

1は、後年エッセイ集『婚礼』に収められるエッセイ「ジェミラの風」のことを指しているであろう。2の「魂の中の死」はエッセイ集『裏と表』に収められたわけだが、この時点では既に印刷に回っていたはずなので、エッセイそのもの書き直しではなく、同じ題材で、つまり1936年の中欧ヨーロッパ旅行、特にプラハにおける深刻な内的危機について改めて何かテキストを書くことを考えていたのだろう。「世界に向かう家」« la Maison devant le monde »は、1936年の春頃から友人たちと共同で借りていた、アルジェの高台にある極めて見晴らしのいい家のことで、そこを舞台にした仲間たちとの交流についてエッセイを書くことをカミュは考えていた。5は実現することがなく、6については前年に提出した学位論文を書き直そうということなのか、新たな論文に取り組もうということなのかははっきりしない。そして4が、カミュがこの頃から再び小説執筆への思いを抱き始めたことを物語っている。だが、この時点で具体的なテーマとしてどのようなものを考えていたのかはわからない。

1937年5月には、先に述べたように、カミュの初めての出版物であるエッセイ集『裏と表』が刊行された。これを契機に、引き続き出版作品についてカミュが一層真剣に考え出したであろうこ

²⁸ それ以前に「小説」という単語が現れるのは、断章1-011に記された「人はイメージを通じてしかものを考えない。哲学者になりたければ小説を書きたまえ」というアフォリズムにおいてのみであり（PLII, p.80）、これは具体的な計画とはなんら関わりを持たない。一方、印刷された『カルネ』では断章1-065よりも前の時期に当たるページに小説に関する計画が現れているが、これは『カルネ』の元原稿にカミュ自身の手による改竄が行われてしまったからである。詳しくは後述。

とは想像に難くない。

1937年の6月には、死刑囚について記された興味深い断章が現れる。死刑囚のテーマは、『異邦人』、『ペスト』、『ギロチンに関する考察』などの例を引くまでもなく、カミュの生涯にわたって姿を見せる重要な文学的テーマであるが、『カルネ』において記されるのはこの断章が初めてのことなのである。

【断章 1-073】 (1937年6月) (PLII, p.816)

ある死刑囚。司祭が毎日その元を訪れる。首を切られる定めにあるので、膝を折ってひざまずき、唇がある名前を語ろうとし、狂おしい思いのあまり床に身を投げ出して「ああ、神様！」という叫びの内に逃げ込む寸前となる。

けれどもそのたびに、それに逆らおうという思いが芽生え、そのように安易なふるまいは行いたくないと感じ、そういった恐れをみな飲み込んでしまおうと思う。男は死んでいく。ひと言も語らず、目に涙をいっばいためて。

死刑囚の元を司祭が訪れるというのは『異邦人』の最終章における出来事を想起させるが、この断章をもって『異邦人』の直接の出発と考えることはできない。この後見るように、『幸福な死』の最初期の構想において、主人公パトリス・メルソーは死刑囚の物語を語るようになっていた。この断章 1-073は、そのような着想の出発点になったものと考えられるべきであろう。しかしその後の構想の変化により、死刑囚の物語は『幸福な死』からは捨て去られることになった。こうしてお蔵入りとなった死刑囚のモチーフを、カミュは『異邦人』において再び利用し、しかし当初のイメージとは全く異なった形に結実させていったのである²⁹。

次いで、6月～7月の間に記されたとおぼしき『カルネ』の断章の中に、マルセルという人物に関するものが立て続けに4つ現れ(断章 1-081, 1-082, 1-083, 1-084)³⁰、そのうち1-082においてマルセルが第一次世界大戦の従軍体験について語っていることばが、その後『幸福な死』第1部第2章においてエマニュエルが語る台詞に利用されることになる³¹。しかしこの時点で、マルセルを小説の登場人物として考えていたのか、それとも実際に出会った人物の会話を書き取ったものなのかは定かではない。

²⁹ ムルソーは最初からキリスト教的な救いとは「無縁」の存在として造形されており、「膝を折ってひざまずく」誘惑に駆られることもなく、処刑を目前にして「目に涙を一杯ためる」こともない。

³⁰ PLII, pp.817-18.

³¹ ただし『幸福な死』におけるエマニュエルは主人公メルソーの同僚であるので、第一次世界大戦に従軍していたはずはない。この習作小説には、このように細部におけるリアリティの欠落が散見される。

断章1-082 (PLII, p.818)

マルセルが目にしたシャルルロワの戦い。
「俺たち、ズアーヴ部隊はだな、こんなふうには散開体制を取られたわけよ。司令官が「突撃！」と声を張り上げた。それで道を下り始めたんだ。木がいっぱい生えた、谷あいの道のようなところだったよ。突撃と言われたよ。敵兵はどこにも見えない。それでまた前進だ。前進だよ、そんなふうにし。そしていきなり、機関銃の弾が雨あられと降り注いできやがった。みんな、折り重なるように倒れていくんだよ。そこら中死体と怪我人ばかりでさ、谷あいの道が血であふれてさ、小舟で渡れるほどだったんだよ。それでお母さん！と泣き声を上げる奴もいてね。ああ、ひどい有様だったよ。」

7月に入ると、36年の中欧ヨーロッパ旅行に関連する2つの断章が現れる。「プラハ。自分自身からの逃走」という頭書きで始まる断章1-090は、プラハのホテルで宿を求める人物とフロント係との対話であり、カミュ自身の体験を想起したものであろうが、小説のためのメモという色彩もある。続く断章1-091は、列車の中で自らの手を見つめている人物の描写である。断章1-090は後に『幸福な死』第2部第1章の冒頭にはほぼそのまま引用され、1-091は第2部第1章の冒頭との関連が深い。だが、だからといってこの時点で『幸福な死』の着想を得ていたという証拠にはならない。小説の着想以前に記していたメモをさかのぼって利用するというのはごく自然なことだからである。

断章1-090 (PLII, p.819)

プラハ。自分自身からの逃走。
「部屋はありますか？」
「ございますとも。ご一泊ですか？」
「いえ。まだわかりません。」
「ご宿泊料金が18クローネ、25クローネ、30クローネとございますが」(返事がない)
「いかがいたしましょう、お客さま？」
「どれでもいいので。(外を見ている)」
「ポーターさん、12号室にお荷物を運んでくれますか。」(我に返る)
「一泊おいくらですか？」
「30クローネになります。」
「高すぎる。18クローネの部屋にしてもらえますか？」
「ポーターさん、34号室だ。」

『幸福な死』第1部第2章 (PLI, p.1110)

「俺たち、ズアーヴの部隊はだな、散開隊形を取られたんだ...」
「やめてくれよ」とメルソーが穏やかに口にする。
「司令官が声を張り上げた。突撃！ それで道を下り始めたんだ。木がいっぱい生えた、谷あいの道のようなところだったよ。突撃と言われたけれど、敵兵はどこにも見えやしない。それでまた前進だ。前進だよ、そんなふうにし。そしていきなり、機関銃の弾が雨あられと降り注いできやがった。みんな、折り重なるように倒れていくんだよ。そこら中死体と怪我人ばかりでさ、谷あいの道が血であふれてさ、カヌーで渡れるほどだったんだよ。お母さん！と泣き声を上げる奴もいてね。ああ、ひどい有様だったよ。」

『幸福な死』第2部第1章 (PLI, p.1138)

部屋はありますか？」と男はドイツ語で尋ねた。
フロント係の方は、鍵を一杯にかけたプレートが背にし、大きなテーブルを挟んでロビーに向かっていた。[...]
「ございますとも、お客さま。ご一泊ですか？」
「いえ、まだわかりません。」
「ご宿泊料金が18クローネ、25クローネ、30クローネとございますが」
メルソーは、扉のガラス窓を通して目に入るプラハの小さな通りを眺めていた。[...]
「いかがいたしましょう、お客さま？」
「どれでもいいので」とメルソーは答える。その目は相変わらず扉の方に注がれていた。[...]
「では、12号室で。」
メルソーは我に返ったように見えた。
「30クローネになります。」
「高すぎる。18クローネの部屋にしてもらえますか。」

そして1-090, 1-091に続く断章1-092は、1936年におけるその中欧ヨーロッパ旅行の旅程を記した詳細なメモとなっている。

【断章1-092】（時期に疑問あり）（PLII, p.820）

リヨン

フォアアールベルクーハレ

クーフシュタイン：チャペルと、雨にうたれ、イン川にそった原。孤独が錨を下ろす。

ザルツブルク：『イエーダーマン』。サンクト・ペーター教会の墓地。ミラベル宮殿の庭園とその見事な成功。雨，フロックス湖と山一高台を歩く。

リンツ：ダニューブ川と労働者街。医師。

プトヴァイス：大通り。ゴチック様式の小さな修道院。孤独。

プラハ：最初の4日間。バロック様式の修道院。ユダヤ人墓地。バロック様式のいくつかの教会。料理店に着く。空腹。金がない。死人。酢漬けのキュウリ。アコーディオンに腰を下ろした腕が不自由な男。

ドレスデン：絵画。

バウツェン：ゴチック様式の墓地。レンガ造りのアーチの中に咲いているゼラニウムとひまわり。

ブレスラウ：霧。いくつかの教会と工場の煙突。この町に特有な悲劇的な様子。

シレジアの平原：非情で不毛な。一砂丘一ねっとりとした朝，粘りつく大地の上を鳥たちが飛ぶ。

オルミュッツ：モラヴィアの優しく，ゆったりとした平原。酸っぱいプラムの木々と，心を揺さぶる遠景。

ブルノ：貧しい地区。

ウィーン —文明—寄り集まった豪華さと，保護してくれる庭園の数々。内なる悲嘆が，この絹の襷のあいだに隠れている。

しかし，この断章が1937年の7月に記されたということはほぼありえない。1年も経ってから旅程を記すというのは不自然である上に，詳細に検討すると，このメモが「『魂の中の死』を執筆するために用いられたことが明白だからである。ところが「魂の中の死」を収めたエッセイ集『裏と表』が出版されたのは，前述のように1937年5月のことなのだ。

実は，カミュの『カルネ』のうち第1分冊のノートには，作家自身の手によると考えられる事後の改編が行われているのである。『カルネ』の草稿を検討した上でその事情を最初に明らかにしたのは，前述のハーバート・R・ロットマンである。それによれば，第1分冊のノートはかなりの部分が削除され，さらにいくつかの断章あるいはページは切り取られた後，それが本来書かれたのとは異なった時期のページに貼り付けるという編集が行われているのだという³²。ところが，多くのカミュ研究家はこのロットマンの指摘にあまり注意を払うことがなく，プレイヤッド版カミュ全集の编者たちに至っては，故意なのか迂闊なのかまったく考慮していない。そこで筆者はロットマンの主張が正しいことをさまざまな傍証から証明した論考を少し前に発表したので，そちらを参照して頂きたい³³。

³² ロットマン，第7章の注。p.689(英)，pp.99.(仏)。

³³ 「カミュ『カルネ』第1分冊校訂の問題点」。『人文社会論叢』第33号（弘前大学人文学部），2015年2月，pp.15-41.（ただし，その中に書き込んだ『カルネ』の訳には後に2箇所ばかり問題点が見つかったので，本

とりわけ、印刷された『カルネ』には1936年6月～10月の期間に記された断章がまったく認められないことから、この間に記されたページが後になって削除、廃棄されたと考えられる。36年夏の旅行は、その途上で妻シモーヌの不貞の証拠をつかみ二人の間で激しい諍いが生じたことが原因となり、深い精神的危機をカミュにもたらした。その際の懊悩を、原因そのものは隠しきった上で、作家はエッセイ「魂の中の死」で描き出したが、『カルネ』のノートに記したさまざまな断章は残しておくには辛すぎる思い出であったのだろう。さらには、シモーヌに関する言及が第1ノートにはまったくと言っていいほど認められないことも、ページが削除されたことの結果であろう³⁴。

こうして、上記の断章1-092については、実際には36年夏の旅の直後に旅程をまとめて記されたものが、第1ノートのページに編集が行われた際、1937年7月と想定される位置に来てしまったのだと考えられる。さらにこの後見るように、『幸福な死』の成立過程の研究を混乱させるという、より重大な改編が第1ノートには存在するのである。

2. 着想への第一歩

1937年の中頃から体調が思わしくなくなったため、カミュは療養を兼ねて7月の末にフランスに渡り、友人たちとともにオート＝サヴォワの山岳地帯で過ごすこととなった。8月に入りいったんパリへ移動すると、中旬にはやはり山岳地帯のアンブランに移って、そこで9月の初旬まで過ごすこととなる。アルジェを離れたことによる非日常的なさまざまな刺激と、自由に想像を巡らせ省察を行うまとまった時間が取れたこと、恐らくはこの二点が契機となって、カミュは小説の執筆を本格的に考えるようになったのだと考えられる。

まず、「37年7月」の日付エントリーがある断章1-098に「演技者の小説のために」と記されており³⁵、続く断章1-099にも「演技者」という単語が現れる³⁶。「演技」ということばでカミュが表し

稿において同じ箇所を引用した場合は修正を行ってある)

また、同様の事情から、断章1-090と1-091も実は1-092と同時期に書かれていて、一緒にこの位置に移された、ということもありうる。しかし1-090は小説を前提にして記された可能性が高いので、1-090及び1-091はやはり1937年7月に記されたものであり、それに関連する1-092を後から切り取って挿入した、ということではなかろうか。

³⁴ 例外として考えられるのは「アルジェの高台にある療養所」での出来事が記されている、1936年3月の日付がある断章1-027 (PLII, pp.804-05) であり、この中で言及されている「僕と一緒にいた若い女性」というのは、まちがいにシモーヌのことを指している。当時シモーヌはアルジェ高台の療養所で麻薬の治療を受けていたからである。ただし、「シモーヌ」という名前そのものは第1ノートには全く出現しない。

³⁵ カミュは時おり『カルネ』の断章の冒頭に年や月、あるいは年月日全体を記しているため、それを「日付エントリー」と呼ぶことにする。編集・改竄が行われた第1ノートにおいても、日付エントリーが記されている場合は時期として信用がおける。すべての断章に日付エントリーが記されていれば研究は大いに捗ったであろうが、その点に関してカミュは非常に気紛れであり、集中的に日付けを記すこともあれば、長い間まったく書き込まないこともあった。

³⁶ それぞれPLII, p.821, p.824, p.824。ただし原文は«le joueur»なので、文脈によっては「賭博者」という意味にも取れるが、本稿では「演技者」で統一する。

たかったのは、自己の内面を偽って送る外的生活、というほどの意味であろう。アンブランで記された断章1-110は、この「演技者」のモチーフを明確にしたメモである。

【断章1-110】（1937年8月）（PLII, p.824）

ある男が、たいていはそういうものだと考えられているような人生（結婚、社会的地位、等）をそれまで追い求めていたというのに、突如として、モードのカタログを読みながら、そういう人生（モードのカタログの中で重んじられているような人生）に対して自分がどれほど無縁な存在であるのかに気が付く。

第1部：それまでの人生。

第2部：演技。

第3部：妥協の放棄と自然の中における真実。

プレイヤッド版旧カミュ全集における『異邦人』の注解の中で、ロジェ・キヨは「この断章が『異邦人』の最初の着想に関わるという旨の証言をカミュから得た」と記しており³⁷、多くの研究者によってその説が採用されたが、断章1-110の内容を『異邦人』と直接につなげるのは無理である。『異邦人』の主人公メルソーは自らの人生に無縁であるなどとは感じておらず、むしろそれに十全に満足しており、さらに「演技」を最初から最後まで拒絶することこそが彼の本質だからだ。

断章1-110はむしろ『幸福な死』の出発点と考えるべきであり、こちらの主人公メルソーは己の真実とかけ離れた毎日に違和感を抱く存在として登場し、そこから脱出するために殺人まで犯し、「自然」に没入することによって幸福の実現を図ることになる。それゆえ、「このメモは『幸福な死』の出発点である」とカミュが言いたかったのをキヨが聞き違えたか、あるいは、カミュが『幸福な死』の着想と失敗そしてそれを足がかりにした『異邦人』への飛躍を一連の分ちがたい流れと考えていたがゆえに、その第一歩だったのだと述べたかったのか、どちらかであろう。

続く断章1-111は「最終章？ パリーマルセイユ。地中海へ向けて南下していく」という書き出しで始まっており、夜の海で泳ぐ幻想的な光景が三人称体で綴られている。「chapitre」という単語が用いられているうえに三人称体であるからには、この断章を小説の一部として使いたかったであろう。実際に『幸福な死』の最終章ではメルソーが一人夜の海で泳ぐシーンが出現することになる。しかしこの断章のテキスト自体は、最終的に、第2部第3章の最終部分で主人公メルソーと三人の女友達の計四人が「世界に向かう家」において、アルジェの星々の夜空を眺め「世界」との秘教的な一体感を味わうシーンに移し替えて用いられることになった。また、テキストが後に利用されたからといって作品の構想がその時点で行われたことの証拠にはならないというのは、断章1-082や1-090におけるのと同様である。

³⁷ PLT, p.1915.

断章 1-082 (PLII, p.818)

[...] そして男は海に入っていく、世界が自分の肌に残していった黒くしかつめらしいイメージを洗い流した。[...] 夜が星々にあふれるこの時、男の腕の動きが、空の黙した巨大なおもてに描かれるのであった。腕を動かせば、輝くこの星と東の間消え失せたように思える星とを分かつ空間が描かれるのであり、その躍動する動きの中に、星々の塊と雲のすそを引き込むのだ。こうして、空の水がその腕でたたかれ、町明かりは輝く貝殻で出来たコートのようにであった。

『幸福な死』第1部第2章 (PLI, p.1166)

[...] 四人は世界を前にする。突然さらに爽やかになった夜の露で、孤独の痕跡が額から洗い流され、四人が自分たち自身から解放され、この打ち震える東の間の洗礼を通じて、世界へと戻されるかのようだ。夜が星々にあふれるこの時、空の黙した巨大なおもてを前にして彼らの動きが止まる。パトリスは夜へ向けて腕を上げ、その躍動する動きの中に、星々の塊と腕で叩かれた空の水を引き込む。足下に見えるアルジェの町は、彼らのまわりで、小石と貝殻で出来た、輝きそして薄暗いコートのようにである。

断章 1-113と 114では再び「演技者」という単語が現れ、114の方には、「第1部：巡回劇団。映画館。大いなる恋の物語」とあり³⁸、小説の構想の萌芽が認められる。そして続く断章 1-115において、「構想 plan」という単語が記され、小説の構想が初めて描き出されるのである。

【断章 1-114】 (1937年8月) (PLII, p.825)

演技者。 [...]

小説のために。

第1部。巡回劇団。映画。大いなる恋の物語 (サント=シャンタル校)。

【断章 1-115】 (1937年8月) (PLII, p.825)

構想の計画。演技と人生を組み合わせる。

第1部。

A — 自分自身からの逃走。

B — Mと貧しさ (全て現在形で)。Aに属する章は演技者を描く。Bに属する章は母親の死までを描く (マルグリットの死 — 様々な職業：仲買業、自動車部品販売、県庁、など)

最終章：日の光へ向かって降る。そして死 (自殺 — 自然な死)

第2部。

逆にする。Aは現在形で：喜びを再び見出す。「世界に向かう家」。カトリーヌとの関係。

Bは過去形で。演技を行う。性的な嫉妬。逃走。

第3部。

すべて現在形で。愛と陽光。違う、と「ギャルソン」が語る。

この構想は、最終的な『幸福な死』の構想と大きく異なっているが、さまざまなテーマの萌芽がそこに認められると言えるだろう。まず主人公のイニシャルとして「M」が記されていることから、

³⁸ PLII, p.825.

後に『幸福な死』で用いられる「メルソー」という姓をすでに着想していたと考えられる³⁹。「母親の死」は断章1-086における着想を引き継ぐものであろうが、後に見るように、完成した『幸福な死』においてはこのテーマは限りなく縮小されることになる。「様々な職業」は、生活費を得るために実際にカミュが転々とした各種の仕事を反映しているが、完成された原稿では、第1部第2章における船荷取引会社におけるメルソーの平凡な日常に反映されることになる。既に述べたように、アルジェの高台にある「世界に向かう家」で友人たちと過ごした牧歌的な時間のことを、1937年の1月頃にはエッセイに仕立てるつもりであったようだが、最終的に小説に取り込むこととなり、『幸福な死』第2部第3章全体が「世界に向かう家」での出来事に充てられるのである。「性的な嫉妬」は、やはり前述の1936年の中欧ヨーロッパ旅行の際に、妻シモーヌの不貞の事実をつかみそれに苦悩したという体験に由来するテーマである。そして「ギャルソン」とは、「世界に向かう家」において友人たちがメルソーのことを呼ぶあだ名であり、実際にカミュもそのように呼ばれていたであろう。このように、この頃カミュの脳裏にあったのは、ここ数年間の自らのさまざまな実体験を素材にして小説を組み立てるということであったのだ。

断章1-117は「1のA2あるいはA5」という頭書きがあり、その後にモノログが続いている(PL, p.826)。小説の素材として思いついたものであろうが、この素材が『幸福な死』に用いられることはなかった。

これに続いて、カミュは3部構成の詳細なメモを『カルネ』のノートに記すことになる。ところが、やはり先に述べたように、『カルネ』第1分冊のノートからかなりのページを削除したことに伴い、いくつかのページが本来あった位置とはかけ離れた場所に貼り付けられてしまったのだ。そのため、第2部と第3部の構成を記した2つの断章および6つの作品素材を記した断章、計3つの断章が、1962年に出版された単行本の『カルネ』第1巻(第1～第3分冊を収録)では1936年1月にあたる位置に印刷されることになったのである⁴⁰。この結果として、多くの研究者や批評家の間で『幸福な死』の着想がこの時期にさかのぼるといふ思い込みが生じ、カミュの初期作品の形成を考察する上で大きな障害となってしまった。

しかしながら、1936年の初頭にカミュが小説の構想を練っていた可能性はほとんどない上に、「ザルツブルク」「性的な嫉妬」という記述は、明らかに1936年8月の中央ヨーロッパ旅行の後でなければ書けない記述である。そこで『カルネ』を新プレイヤッド版に収録するに当たりその編者はこ

³⁹ メルソー Mersault という実際には存在しない姓をカミュはどのようにして考えついたのであろうか。かつてエマニュエル・ロブレスは「Mer(海)+sol(スペイン語で太陽)」の組み合わせだという説を唱えたそうだが、根拠に乏しい。新プレイヤッド版において『幸福な死』の注解を行ったベテランのカミュ研究者アンドレ・アブーは、「アルジェの予審判事の書記を務めていた Marsault 氏の姓からヒントを得たのだ」という大胆な仮説を示している(PLI, p.1446)。確かに「メルソー」は「マルソー」のもじりだという可能性はかなり高いと思われるが、マルソーという姓自体はありふれたものなので、特定の個人を挙げることには説得力がない。

⁴⁰ CaI, pp.24-26.

れら3つの断章を1936年の夏以降と考えられる位置に移動させるという弥縫策を施した⁴¹。だが、そこが本来の正しい位置であるという客観的な根拠は皆無であり、なによりも、第2部の構想が先に生じそれから長い期間が経ってから第1部の構想が記されたという不可思議な矛盾の解決にはならない。これら3つの断章は、その内容や記述のスタイルから見て、第1部の構想を記した断章1-118に続けて記されたとしか考えられないのである⁴²。

こうして、一連の断章1-118, 1-048, 1-049, 1-050をそれらが本来記されたと考えられる順番に並べて検討すると、この時期にカミュが抱いていた、『幸福な死』の元となる小説の構想が明らかになるのである。また、1-118においては「メルソー」という名前が初めて出現している（少年期においては「パトリス」であり、青年期については「メルソー」と記されていると思われる。そして『幸福な死』の主人公の名称はそのまま「パトリス・メルソー」となる）。

【断章 1-118】（1937年8月）（PLII, p.826）

構想。3部構成。

第1部：Aは現在形で、Bは過去形で。

第1章A — 外側から見たメルソー氏の一日。

第1章B — パリ通りにある貧しい地区⁴³。馬肉屋。パトリスとその家族。口を利けない男。祖母。

第2章A — 会話と逆説。グルニエ。映画。

第2章B — パトリスの病气。医者「症状のこの激発は…」

第3章A — 巡回劇団の一ヶ月の公演。

第3章B — 職業（仲買業、自動車部品販売、県庁）

第4章A — 大いなる恋の物語「そうした恋心を抱いたことは一度もないのですか?」「ありますよ、マダム。あなたを前にして」。拳銃のテーマ。

第4章B — 母親の死。

第5章A — レイモンドとの出会い。

⁴¹ PLII, pp.810-11.

⁴² やはり、前掲の拙論「『カミュ『カルネ』第1分冊校訂の問題点』」を参照のこと。とりわけ、レヴィ=ヴァランシがこの事実を完全には理解していなかったことは、その大著における『幸福な死』の分析に大きな影を落としてしまっている。

なおこれら3つの断章は、プレイヤッド版の弥縫策における順番に従えば1-048, 1-049, 1-050となるので、やむを得ずこの番号で呼ぶことにする。また、単行本CaIにおける初出の順番に従えば「1-012, 1-013, 1-014」となる。

⁴³ 「パリ通り」と訳した部分は原文では単に« Paris »であるが、小説の舞台がいきなりアルジェからパリに飛ぶとは考えられない。カミュ一家が暮らしたのはアルジェの「リヨン通り」であるので、それをもじって「パリ通り」という地名を考えたのではなかろうか。

【断章 1-048】 (PLII, p.810)

第2部：Aは現在形で，Bは過去形で。

第1章A — 「世界に向かう家」。紹介。

第1章B — 彼は思い出す。リュシエンヌとの関係。

第2章A — 「世界に向かう家」。彼の若さ。

第2章B — リュシエンヌは，不貞を働いたことを語る。

第3章A — 「世界に向かう家」。招待。

第3章B — 性的な嫉妬。ザルツブルク。プラハ。

第4章A — 「世界に向かう家」。日の光。

第4章B — 逃亡（手紙）。アルジェ。風邪を引き，病に伏せる。

第5章A — 星々を見上げる夜。カトリーヌ。

【断章 1-049】 (PLII, p.811)

パトリスは，死刑囚に関して自分が考えた物語を語る「見えるんだよ。その男がね。そいつは僕の中にあるんだ。そいつがひと言語る度に，心が締め付けられるよ。そいつは僕と一緒に生き，呼吸をしているんだ。そいつが恐怖を覚えると，僕も恐怖を感じるんだ。」[...]

第3部（全て現在形で）

第1章 — パトリスは語る「カトリーヌ，今や僕にわかっているのは，これから物を書くということだ。死刑囚の物語だよ。僕の本当の務め，物を書くということに立ち戻ったんだよ」。

第2章 — 「世界に向かう家」から港の方へと下っていく。死と日の光の味わい。生きることへの愛。⁴⁴

【断章 1-050】 (PLII, p.811)

6つの物語。

華々しい演技の物語⁴⁵。豪華。

貧しい地区の物語。母親の死。

「世界に向かう家」の物語。

性的な嫉妬の物語。

死刑囚の物語。

日の光の方へ降っていく物語。

まず断章1-050に着目し，それから先立つ3つの断章を検討すると，これら「6つの物語」が【表4】のように3部構成の中に配置されていることがわかる（A群が現在形，B群が過去形とされていることから，時系列に従ってAを先立てることとする）。つまり，断章1-050というのは，断章1-118，1-048，1-049における題材をまとめ直して「6つの物語」を抽出させたものなのである。

⁴⁴ 中略とした部分には，主人公の長いせりふが書き込まれている。それが「死刑囚の物語」の内容なのであろう。

⁴⁵ 原文は« Histoire du jeu brillant »であり，フランス語の« jeu »は極めて多義的であるが，« jeu brillant »という結びつきならば通常は「華麗なる賭け」という意味に用いられると思われる。だがこの時期のカミュは« jeu »という単語を一貫して「演技」という意味に用いており，『幸福な死』，『カリギュラ』，『誤解』の着想過程においてはなんども「演技」というテーマが姿を現すのである。

【表4】

第1部A	貧しい地区の物語	パトリスの家族, 病気, 職業, 母親の死
第1部B	華々しい演技の物語	メルソーの一日, 会話, 映画, 巡回劇団, 大いなる恋愛, レイモンド
第2部A	「世界に向かう家」の物語	「世界に向かう家」の紹介, 若さ, 招待, 日の光, 夜空
第2部B	性的な嫉妬の物語	リュシエンヌが不貞を告白, ザルツブルク, プラハ, アルジェへの帰還
第3部第1章	死刑囚の物語	パトリスが, 死刑囚に関して自分が考えた物語を語る
第3部第2章	日の光の方へ降っていく物語	「世界に向かう家」から港の方へと下る

もちろん、本来断章1-050の方が先に来ている、それに基づいて3つの断章を記したのに、改竄の際に断章1-050の方が後に置かれてしまったという可能性もあるが、構想を元に6つの物語を抽出させた、と考える方がはるかに自然だと思われる。いずれにせよ、この4つの断章をひとまとまりのものとして捉えなければならないことは明らかであろう⁴⁶。そしてこれらの全体が、断章1-115における構想を拡大、発展させたものなのである。以上から、1937年8月にアンブランで記された、1-115から1-050に至る一連の断章群が、『幸福な死』の構想における重要な第一歩であると結論づけることができるであろう。(以下、この時期の構想を「第1期の構想」と呼ぶことにする)

引き続きカミュは、小説の構想に関する断章を3つ連続して記しているが、どれも短いものであり、具体的な展開は認められない。

【断章1-119】 (1937年8月) (PLII, p.826)

あるいは：

- I A — 性的な嫉妬。
B — 貧しい地区—母親。
- II A — 「世界に向かう家」—星々。
B — 溢れかえるような日々。
- III 逃亡 — 彼が愛さぬカトリーヌ。

【断章1-120】 (1937年8月) (PLII, p.827)

内容を縮小し、引き締めること。性的な嫉妬の物語。それにより追放の思いが生じる。日々の生活に立ち戻ること。 [...]

【断章1-121】 (1937年8月) (PLII, p.827)

プラハへの到着 — 出発まで — 病気
説明 — リュシール — 逃亡。

⁴⁶ 例えばCAC1に収録された『『幸福な死』の形成過程』におけるジャン・サロッキは、こうした捉え方ができなかったため、議論が混乱を極めており、それが他の多くのカミュ研究者にも波及している。

「第1期の構想」をまとめ上げたカミュは、明らかに次なる課題に立ち向かわなければならなかった。実体験に基づくさまざまな素材や「死刑囚の物語」という仮想的なモチーフを列挙し、それらをさまざまに組み合わせではみたものの、それだけでは作品の姿は見えてこないからである。

3. 作品のテーマの探求とイタリア体験

では、小説全体をどのような主題の元にまとめあげるかという根源的な課題に、カミュはいかなる形で着手したのであろうか。その点に関して着目する必要があるのが、一つ置いた断章1-123であろう。

【断章1-123】（1937年8月）（PLII, p.827）

小説：その男は、生きるためには金持ちになる必要があると悟り、金銭の獲得に全身全霊を捧げ、それに成功を収め、生き、そして幸福に死んでいく。（下線強調は、原文でイタリック）

一読しただけでは極めて卑俗な一文に過ぎないが、「幸せに死んでいく」という表現は、そのまま『幸福な死』という小説のタイトル、そしてそのテーマへとつながっていく。そして「幸せに死ぬ」というのは、巷間そう考えられているような「自らの人生に満足しつつ、親しい人々に看取られ、平穏な心境で死を迎える」ということではなく、若きカミュにおける独特な死生観を反映した、秘密の儀式のようなイメージを物語っているのである。

この「幸福とはなにか」という問題は、死のみならず生きることとも結びつき、小説においては「生きるために金持ちとなる」ことから「幸福になるために金持ちとなる」ことへと転換される。最後に、男の役割は二つに分割され、「幸福を目指して金銭の獲得に全身全霊を捧げる」のはザグラーの役目となり、その金銭によって「幸福に生き、幸福な死を迎える」のは、ザグラーを引き継いだメルソーの務めとなっていくのである。

では、カミュの世界において「幸福である」とはいったいどういうことなのか、あるいはカミュ個人はどのような「幸福」を目指そうとしていたのか。その問いへの大きなヒントを与えてくれたのが、カミュにとって生涯「靈感の地」であり続けたイタリアであった。すでに前年の1936年の夏、中央ヨーロッパの旅における精神的な試練の後、イタリア経由でアルジェに戻る途中に北部のヴィチェンツァで内的な蘇生感を味わい、それがエッセイ「魂の中の死」の後半部につながっていた。

イタリアへと入る。それは僕の魂のために作られた土地だ。イタリアが近づいてくる印が一つ一つ、目に入ってくる。[...] そして次には、ヴィチェンツァだ。この地では、毎日がそれ自身の上で過ぎていく。一日の目覚めは鶏の鳴き声で満ちあふれ、比べるものとなない夕暮れは、甘ったるく優しげで、糸杉の背後で絹のような光沢を見せ、セミの奏でる音によってその長さがわかるのだ。[...] 僕は、自分に可能であるただ一つの幸福を呼吸する。それは注意深く、また友愛に満ちた意識のことなのだ。一日中散策を行う。丘の上からヴィチェンツァの町へと降りていき、あるいはさらに野原へと進んでいく。（PLI, p.61.）

そして37年夏の旅においても、アルジェリアに帰国する途中、9月の上旬から中旬にかけてカミュ一行はイタリアに立ち寄ることになる。ピサからフィレンツェを經由し、青年カミュはまずイタリア芸術との邂逅を果たし、芸術的感興に大きく心を揺さぶられる。そしてフィレンツェ郊外のフィエゾーレを訪れた際、そのサンフランチェスコ教会において、雷撃に撃たれたかのごとき精神的高揚を体験したのであった。それを詳細に書き記したのが、『カルネ』第1分冊の末尾に記された、「9月15日」の日付を持つ、長大な断章1-141である。この断章の前半を、カミュは後に、エッセイ集『婚礼』に収められた「砂漠」において利用することになる。

断章1-141 (PLII, p.832)

世界がかくも壮麗であることは、あのフランシスコ修道会士たちの正しさを証しているのだ。大いなる誇りをもって信じようと思うのは、それによって僕の正しさも、僕の種族である全ての人間の正しさも、証されているということだ。彼らには、貧しさがある極点に達したならば、世界の豪奢と豊かさに必ずつながるのだということがわかっている。その人たちが着ている物を脱ぎ捨てるのは、より偉大な生き方のためだ（そして別の人生のためにはではない）。それだけが、「全てを失う」という言葉の意味として納得がいくことである。「裸になる」ということには、つねに肉体的な自由という意味がある。そして手と花々とのこの一致、大地と、人間的なものから解放された人間との間の、愛にみちたこの了解、ああ、僕はそれに改宗してしまいたい。もしそれが既に僕の信仰となっていなかったのならば。

「砂漠」(PLI, p.133)

世界がかくも壮麗であることは、この女性たちと花々は、あのフランシスコ修道会士たちの正しさを証していたのだ。それによって僕の種族である全ての人間の正しさも証されているかどうかには確信が持てなかったが。柱廊と花々の間に閉じこもる修道士たちの暮らしと、アルジェのパドヴァニ浜辺で一年中陽光を浴びて過ごす若者たちの毎日の間に、ある共通した響きがあるのを僕は感じていた。彼らには、貧しさがある極点に達したならば、世界の豪奢と豊かさに必ずつながるのだということがわかっている。その人たちが着ている物を脱ぎ捨てるのは、より偉大な生き方のためだ（そして別の人生のためにはではない）。それだけが、「全てを失う」という言葉の意味として納得がいくことである。「裸になる」ということには、つねに肉体的な自由という意味がある。そして手と花々とのこの一致、大地と、人間的なものから解放された人間との間の、愛にみちたこの了解、ああ、僕はそれに改宗してしまいたい。もしそれが既に僕の信仰となっていなかったのならば。

世俗的な要素をすべて全て捨て去ることで、精神的に「裸になり」「貧しさの極点に至った」修道会士たちは（「砂漠」のテキストにおいては、彼らは肉体的に「裸になる」アルジェの若者たちと共通項で括られている）、まさにそのことによって「世界」が持つ本当の豊かさに達しようののだという感慨をカミュは抱いた。その「世界」とは、花々や大地によって示される、一つの実在としての「自然」である。「人間的なものから解放された人間」、すなわち、社会的な要素を剥奪され、究極の個に還元されてしまったおのれと、そうした「世界」との不可思議な一体感、それこそが若きカミュの求めた至上の境地であった。エッセイ「裏と表」に描かれた、冬を背景にした「世界」との交感のイメージは、九月のイタリアにおける陽光の下で次なる展開を見せたのである。かつてつぶやいた、「自分は世界」であり、「僕の王国はこの世界のものだ」という言葉の新たな意味を、カミュは見出したのであった。

断章1-141の続く部分は、この感動を受けて、カミュが覚えた激しい解放感を全面的に吐露した

テキストとなっている。これまで縛られてきたさまざまな苦悩から解放されたという実感の元（その苦悩の中心を成していたのは、あれほど深く愛したシモーヌとの関係が破綻したことでありう）、自ら形成する精神世界の価値を全面的に称揚し、そこにあえて閉じこもることで創造的な営みに近づこうという決意が語られる。当時のカミュにとっては、おそらくはそうした営為の果てに獲得できるものこそが「幸福」なのであって、当然ながら「私は幸福だとふつうに語られることとは逆のことがら」なのである。

そしてカミュは、『幸福な死』第2部第2章の末尾において、中央ヨーロッパへの旅という精神的かつ実存に関わる試練を経たメルソーが、アルジェへ戻る船中において、ついに自らが幸福の探求を目指す存在として生まれ変わったのだと自覚するシーンに、この断章1-141のテキストをほぼ全面的に使用しているのである。

断章1-141

今日僕は、自らの過去から、失ったものから、解放されていると感じる。僕が望むのはただ、ここに閉じこもることと、この閉ざされた空間だけだ — この明晰で辛抱強い熱情だけなのだ。焼きたてのパンをぎゅっとつまみ押しつぶすかのように、この命を両手でつかんでいたいだけ思うのだ。生きる日々を花々と柱廊の間に閉じ込めることができたあの修道士たちと同じように。また、列車で過ごすあの長い毎夜においても同じく、自らと直面し、自らに話しかけ、生きるための支度を調えるのだ。そして、再び考え事に取りかかり、考えごとがすり抜けようとするのを押しとどめ、さらに推し進めようとするあの称えるべき忍耐。己が生きる日々を、棒の形をした大麦飴を舐めるように舐め回し、形を整え、先を尖らし、最後には愛するのだ。そして同じく、ことは、イメージ、決定的な一文を探すのだ。[...] 自分が自分自身を前にしているということ、それを最後まで貫き、生きることのあらゆる相貌を前にしてそれを保つことが、僕の務めなのだ。たとえ、今やかくも耐えがたく感じている孤独というものを甘受しなくてはならないとしても。妥協してはならぬ。それが肝心なのだ。膝を屈してはならぬ。裏切ってはならぬ。僕の気性の荒々しさがおしなべてそうしないことの助けとなってくれる。その荒々しさによって僕が保たれている高みにおいて、僕は自らの愛と一体化し、それとともに、僕の日々に意味をもたらしてくれる、生きることへの狂おしい情熱と一体化するのだ。(PLII, pp.832-33) [...]

初めて、幸福という言葉の意味があいまいなものではないと思われる。それは少しばかり、「僕は幸福だ」とふつうに語られることとは逆のことがらなのだ。(PLII, pp. 833) [...] そこにこそ僕の慎ましさと、独特な豊かさがあった。それはまるで、勝負を再び始めるようなものだった。それ以上に幸せでもなく、それ以上に不幸せでもなく。けれども、自らの力を意識し、虚栄の思いを侮蔑し、自らの定めへと押しやるあの明晰な熱情とともにあったのだ。(PLII, p.834)

『幸福な死』第2部第2章

たった一つのことに変化していた。メルソーは、自らの過去から、失ったものから、解放されていると感じていたのだ。望むのはただ、ここに閉じこもることと、自らの内なるこの閉ざされた空間、世界を前にしたこの明晰で辛抱強い熱情だけなのだ。焼きたてのパンをぎゅっとつまみ押しつぶすかのように、この命を両手でつかんでいたいだけ思うのだ。列車で過ごしたあの長い毎夜において、自らと直面し、自らに話しかけ、生きるための支度を調べていたのと同じように。己が生きる日々を、棒の形をした大麦飴を舐めるように舐め回し、形を整え、先を尖らし、最後には愛するのだ。そこにこそメルソーの情熱の全てがあった。自分が自分自身を前にしているということ、それを最後まで貫き、生きることのあらゆる相貌を前にしてそれを保つことが、己の務めなのだ。たとえ、今やかくも耐えがたく感じている孤独というものを甘受しなくてはならぬとしても。裏切りはしない。その気性の荒々しさがおしなべてその助けとなってくれる。その荒々しさによってメルソーが保たれている高みにおいて、彼は自らの愛と一体化し、そして生きることへの狂おしい情熱と一体化するのだ。

(PLI, pp.1153-54) [...]

そこにこそメルソーの慎ましさと、独特な豊かさがあった。それはまるで、無得点に終わったのに、勝負を再び始めるようなものだった。けれども、自らの力を意識し、虚栄の思いを侮蔑し、自らの定めへと押しやるあの明晰な熱情とともにあったのだ。

(PLI, p.1154)

このように、1937年9月におけるイタリア体験は決定的な意味を持っていた。それは一方ではカミュ個人における一つの精神的な脱皮をもたらし、そして他方では、8月にさまざまに形成した小説に関するアイデアを具体的な作品構想へと推し進めるといふ発射台の役割を果たしたのである。

4. 『カルネ』の記事の一覧

ここで、全体の見通しをよくするために、『カルネ』において直接あるいは間接的に『幸福な死』の着想と執筆に何らかの関連を備えている断章について、【表5】としてその一覧表を掲載しておこう。「関連」の項目における記号については、次のような意味になる。

- ◎：断章のテキストの一部あるいは全体が『幸福な死』の文章として用いられている。
- ：テキストの引用は行われていないが、内容的に関連が認められる。
- ☆：『幸福な死』の構想あるいはテーマに関わる。
- △：『幸福な死』への言及はあるが、実際には直接の関わりを持たない。

また、前述のように問題となっている断章1-48～50については本来あるべき位置に移してある⁴⁷。なお、指摘するまでもなく、1936年に記された数編の断章から『幸福な死』に引用されているからといって、この時点で小説の着想が行われていたということにはならない。これまでの分析で明らかかなように、着想に至ったのは1937年8月のことであり、カミュはあくまでも素材として、36年に書き付けたテキストをさかのぼって使用したのである。

【表5：『幸福な死』関連『カルネ』断章一覧】

番号	ページ	時期	概要・備考	関連
1-009	798	1935年5月～ 36年1月の間	レストランの前で殺害された人物を目撃した描写 →『幸福な死』第2部第1章において、プラハでの事件として描かれる。	◎
1-028	805-06	1936年3月 【実際はより後の時期と推定】	人物「M」とその自殺願望に関する小説的描写 →前半は『幸福な死』におけるザグラーの描写として用いられる 後半は、『シーシュポスの神話』における1エピソードと関連	◎
1-034	807	1936年4月	挿話。1) 重傷を負った港湾労働者→『幸福な死』におけるエピソード 2) 死んだ子猫を食べてしまう母猫→『裏と表』所収の「ウイとノンの間」で利用される。	◎
1-035	807	同上	港湾労働者の折れた脚	○
1-036	807	同上	挿話。トラックの後ろを全速力で追いかける二人の若者 →『幸福な死』について『異邦人』におけるエピソードとして利用される。	◎

⁴⁷ 断章1-092については、本来あるべき位置を想定することが無理なので、元のままにしてある。また、第2部で述べるように断章1-028もこの時点で記されたのではないという可能性が高いが、これもそのままの位置にしてある。

1-092	820	【1936年9月頃と推定】	1936年の夏における、中央ヨーロッパの旅の旅程 →後半のメモは、エッセイ「魂の中の死」後半の描写の原型と考えられる。 →この断章は1937年7月の時期に現れているが、「魂の中の死」を含むエッセイ集『裏と表』は1937年5月の出版なので、これはありえない。おそらく、36年夏の旅が終わった直後に記されたものではないか。	○
1-055	813	1937年1月	「世界を望む家」に関するエッセイの計画。キーセンテンスと台詞 →いくつかが『幸福な死』II-3で使用される	○
1-056	813	同上	「世界を望む家」が高台にあることへの言及→『幸福な死』II-3で使用	○
1-064	814	年4月	登場人物「自分の正しさを明かそうとしない男」	
1-065	814-15	同上	執筆の計画 1) 遺跡に関するエッセイ 2) 「魂の中の死」を再度取り上げる 3) 世界を望む家 4) 小説 5) マルローについてのエッセイ 6) 論文	
1-073	816	1937年6月	挿話。救いへの叫びを拒否する死刑囚→『カルネ』において初めて現れる死刑囚のモチーフ	
1-081	817	6月～7月の間	マルセルという人物の台詞	
1-082	818	同上	マルセルが語る、第一次大戦におけるシャルルロワの戦い →『幸福な死』においてエマニュエルが語るエピソードに利用される。	◎
1-083	818	同上	マルセルと、もう一人の人物の会話	
1-084	818	同上	マルセルの台詞。大食らいの孫について	
1-086	819	同上	小説の案。母親の死、関わり持たぬということ。	
1-090	819	同上	プラハのホテルでの、フロント係とのやり取り →『幸福な死』第2部第1章の冒頭で用いられることになる。 ただし、この時点ですでに小説の構想があったという確証はない。	◎
1-091	820	同上	列車の中で自分の手を見つめる人物 →『幸福な死』第2部第2章の冒頭とわずかな関わり	○
1-098	821	年7月	着想。「演技者の小説」	
1-099	821	同上	演技者の小説	
1-108	823	8月	情景。毎日の山歩き。風景や自然との対峙。 アンブランにおける療養中の日々に着想を得たものと思われるが、ilという三人称体を用い、小説的な表現になっている。作品への利用を考えていたのかもしれない。	
1-110	824	同上	小説の構想。突如自らの人生に違和感を感じた男。3部構成 →『幸福な死』の構想へつながる萌芽と考えられる。	
1-111	824	同上	「最終章? パリ-マルセイユ 地中海への南下」という1文に続いて、夜の海で泳ぎ、「世界」との不思議な一体感を覚える男の描写 →『幸福な死』第2部第3章の最終場面に使用	◎
1-112	824	同上	一文:「二人の登場人物。片方が自殺?」	
1-113	824	同上	小説の会話の場面 「演技者」という頭書き。「カトリーヌ」という名	
1-114	825	同上	小説の構想。「演技者」 →この構想はその後発展しなかった。	
1-115	825	同上	小説の構想 3部構成。AとBの二つのストーリーが交替。第3部は現在形で。 「自然な死」「世界を望む家」「性的な嫉妬」「ギャルソン」など、その後『幸福な死』に盛り込まれるキーワードが出現	☆

1-117	826	同上	「第1章A2あるいはA5」会話の下書き 小説の構想に関連するが、実際の『幸福な死』には用いられなかった	☆
1-118	826	同上	小説の構想 冒頭に「三部構成」とあるが、実際には第1部の構想のみ 現在形を用いたAの系列と、過去形を用いたBの系列が交互に現れる	☆
1-048	810	【1937年8月と推定される】	小説の構想。「第二部」→『幸福な死』に関連	☆
1-049	810-11	同上	パトリスという登場人物が「死刑囚」について語る言葉 小説の構想「第3部」→『幸福な死』に関連	☆
1-050	811	同上	小説に用いる素材。6つの物語 →『幸福な死』に関連	☆
1-119	826	同上	小説の構想。I～IIIの三部構成だが、118のものと比べると簡素	☆
1-120	827	同上	小説のためのメモ。「性的な嫉妬」のモチーフ	☆
1-121	827	同上	小説のためのメモ。プラハ	☆
1-123	827	同上	小説のためのメモ。『幸福な死』のテーマに関連	☆
1-141	832-34	9月15日	数ページにわたる長大かつ重要な断章。 フィエゾーレのサン・フランチェスコ修道院を訪れた際の情景描写に始まり、それにインスパイアされた形で、自然と人間（自己）の一体化という神秘的な体験に関する省察を綴り、自らの「生」を振り返り、「幸福」に関する独特な考察へと至る。 →『幸福な死』の決定的な構想のきっかけとなり、この断章の文章は同作に利用される。その後、エッセイ「砂漠」で再度活用される。	◎
2-001	834-35	9月22日	『幸福な死』という題名の出現 小説の主人公とおぼしき人物とクレールとの会話 →『幸福な死』I-4において、メルソーとザグラーとの会話に転用される。	◎
2-003	835	9月23～25日	« »に入れられた、小説へ向けた断片。人物の寝起きの場 →『幸福な死』II-1、プラハのホテルにおける描写で利用 ただし、この断章では「アパルトマン」とされており（小説において「部屋」に変えられた）、当初はホテルにおける描写に予定されていなかった。	◎
2-006	836	9月26日	「日記よりも小説の断片を優先させること」 小説のためらしきメモ	
2-010	838	9月30日	小説へ向けた対話。 「お仕事は何を？— 数えているんですよ —えっ？」 →『幸福な死』に直接用いられることはなかった。	
2-011	838	同上	一文「早く認められたいあまり、書き直そうとしないのだ」	
2-012	838	10月4日	雨の中をさまよう光景。中欧での経験が基？ 「彼は幸福になりたかった。幸福になる権利があった。だがそれにふさわしくなかったのだ」 →MHのテーマと関わると思われるが、この文は作品に現れない。	
2-019	840	10月18日	情景描写。9月のアルジェリアにおける、イナゴ豆の花の官能的な香り →『幸福な死』II-4最終部分でほぼそのまま用いられる。 →MHを経て、「アルジェの夏」の最終部分に転用	◎
2-021	841	10月20日	小説へ向けた断片。「幸福への欲求と、忍耐に満ちた幸福の探求」 「幸福」のテーマの明示。→『幸福な死』のテーマにつながる。	○

2-026	842	11月7日	登場人物 A.M. 一両脚を失っている。←ザグラーの原型 →せりふが『幸福な死』I-4におけるザグラーのせりふにそのまま使用される	◎
2-028	842-43	11月13日	クヴィクリンスキーの会話 →『幸福な死』II-4で医師バルナールのせりふとして利用	◎
2-029	843	11月16日	登場人物のせりふ「大いなる愛を抱かねばならない」	
2-030	843-44	11月17日	小説の構想。「幸福への意志」 第3部：幸福の実現。数年が経ち、季節が移ろう。 第1部（最終部分で）不自由な男がメルソーに言う 「金がなくても幸せになれると思うのは俗物根性だ」等々 →「メルソー」という名前の初出 →語られているせりふは、I-4におけるザグラーのせりふにそのまま使用	◎
2-032	844	12月	小説の断片。雨が降る野原を歩き続けるメルソー。わびしい場面。 →『幸福な死』I-4の冒頭でそのまま使用 [ただし、末尾に（ザルツブルクにて）とある。元は第二部で使用する予定だったのか？]	◎
2-033	844	同上	一文「マルトに対する皮肉 — 彼女を捨てる」	○
2-034	844	同上	人物描写「将来をたいへん囑望されながら、今では一サラリーマンに過ぎない男」→小説に直接用いられることはなかった。	
2-036	845	同上	一文「自分自身になる時間はない。幸せになるための時間しかないのだ」 →MHのテーマだが、そのまま使用されることはなかった。	○
2-038	846-47	同上	小説の断片。ある女性の不思議な仕草。夜の街角でのキスの詳細な描写。 『幸福な死』II-3におけるリュシエンヌの描写にそのまま用いられる。 なお、この断章においては女性の名前は「マルト」になっている。 (←マルトとリュシエンヌのモデルがともにシモーヌであることを示唆)	◎
2-039	847	同上	女性に取り巻かれた男	
2-041	847	1937年12月 ～1938年1月	小説一第1部。「我々アルジェリア歩兵部隊は...」 ある黒人「おまえは嫌な奴だ」等々 小説の題名「純粋な心、地上で幸せな者たち、黄金色の光」 →実際の作品とはほとんど関わりを持たない	△
2-043	848	同上	小説一第1部。郊外にあるザグラーの住まい。殺人。部屋は暖房が効きすぎて、外に出たメルソーは風邪を引く（それがきっかけとなった病気で最期を向かえる） 第4章：ザグラーとの会話。「非個性」について →「ザグラー」という名称、および殺人のプロットが初出	◎
2-044	848	同上	小説一第4部。受け身の女。Mのせりふ 「間違いとは、選ばなければならないとか、望むことをしなければならぬとか、幸福には条件があるとか、思い込むことなんだ。 →『幸福な死』IV-4で、メルソーがカトリーヌに語るせりふでほぼそのまま用いられる。	◎
2-045	848	同上	小説一第3部。「しばらくしてメルソーは別れを告げた」 →『幸福な死』IV-4においてメルソーが「世界を望む家」に別れを告げた経緯が語られる場面ではほぼそのまま用いられる。	◎
			(断章2-45から2-46にかけて、ほぼ2ヶ月間の空白がある。おそらく、この間カミュは、『幸福な死』の執筆そのものに集中していたのだろう)	

2-051	850	4月	作品や創作計画に関するメモ 「エッセイ2作を送付する。(←断章2-63との関わりから、「ティパサでの婚礼」と「ジェミラの風」がこの時点で一応完成していたと思われる) 『カリギュラ』は未だ熟せず。アルジェで出版しよう。 論文。ノートを毎日付けること。2年後に「作品」を書くこと。	○
2-060	852	6月	「『幸福な死』のために」とされた覚え書き2行 「一連の別れの手紙」「明晰さによる傑作」 →MH書き直しも考えたのだと思われる。	△
2-061	852	同上	小説の最後で、酒を飲んでいるメルソー。セレストが話しかける。 「老けたね、メルソー」 →作品で用いられることはなかった。	△
2-063	853	同上	夏の計画 1) フィレンツェとアルジェを終える (←「砂漠」と「アルジェの夏」を指していると思われる) 2) カリギュラ 3) 夏の即興劇 4) 演劇に関するエッセイ 5) 40時間に関するエッセイ 6) 小説の書き直し 7) 不条理 (←『神話』の着想と思われる)	△
2-065	853	同上	頭書き：小説 ベルナールという人物の会話 「僕には大きな欠点があるといふと認めざるをえないね」等々 (ベルナール)はMHに登場する医師の名前であり、この一節は、MHの書き直しを考えてのことかもしれない。だが実際に用いられることはなかった。	△
2-071	855	6月～7月	『幸福な死』列車で、ザグルーは彼の前に腰を下ろす。(→作品とは無関係)	△

第3章：『幸福な死』の構想の変遷

1. さまざまなテキスト

1937年9月22日、カミュは『カルネ』の2冊目のノートを記し始める。その冒頭の一行に『幸福な死』という題名が記されているという事実は極めて重要であろう。まず、カミュはこの時点で作品の題名を着想したのであり、題名の決定というのは一般に、それまで漠然としたアイデアに過ぎなかったものに実体的な枠組みをはめることで、作品の制作へ向けた重要な一歩となる。さらに、この第2ノートがそれから当分のあいだ『幸福な死』の創作ノートとしての機能を果たすことになるということを予告しているのである。

第2ノートの第1断章には、題名の明記に続いて、小説の主人公とおぼしき人物とクレールという女性との間で交わされる長大な対話が記されている。この時点でカミュがこの対話を作品のどの部分で利用しようとしていたのかはわからない。しかし最終的に、作品の構想が大きく変更になったあと、カミュはこのテキストを、『幸福な死』第1部第4章におけるメルソーと資産家ザグルーとの間での会話に利用することになる。会話の相手が女性のクレールから年上の男性ザグルーに置

き換わったために⁴⁸、文面は同じようなものであっても、会話の持つニュアンスはかなり変更を受けられることとなった（そのため、原文では同一であっても引用訳における日本語の表現はかなり変えてある部分がある）

断章2-001 (PLII, pp.834-35)

9月22日

『幸福な死』「一だってね、クレール、そのわけを話すのは難しいんだよ。問題となるのは一つだけだ：自らが何に値するかを知ること、だよ。[...] 生きる日々とその秘密の色合いを目にすると、自分の中に涙の震えのようなものが起こるんだ。僕という存在は、キスをしたあの何人もの女の唇であるし、「世界に向かう家」で過ごしたあの幾夜もの晩であるし、貧しく育った子供でもあり、そして時として熱狂へと導いてしまう、生きることと切望することへの狂ったような思いなんだよ。知り合いの多くは、時々、僕が何者なのかわからなくなってしまう。僕のほうは、どこにしようが、世界のあの人間を超えたイメージに自分が似ていると感じているんだけどね。そのイメージが、僕が生きる日々そのものなんだよ。」

「わかるわ。同時に二つの舞台で演じているわけね」
[...]

「あなたに愛情を抱く人たちには、ずいぶんと辛いことが待ちかまえているわね。」

パトリスは立ち上がった。なにか希望を失ったような光がその目に宿る。そして口を開いた。

「愛情を抱かれたって、何の義務もありはしないよ。」

クレールは答えた「確かにそうね。でも、わたしにはわかるのよ。(あなたはいつか、たった一人になってしまうわ)」

『幸福な死』第1部第4章 (PLI, pp.1128-29)

「済みません、ザグルー。ですがもう長いこと、ある種の事柄については語らないようにしてきたのです。ですからもうわからないし、あるいはよくわからないのです。生きる日々とその秘密の色合いを目にすると、自分の中に涙の震えのようなものが起こります。この雨空のように。同時に雨でもあり日差しでもあり、同時に昼間でもあり真夜中でもあるんです。ええ、ザグルー！ 考えるのは、キスをしたあの何人もの女の唇だったり、貧しい子供だったかつての自分だったり、時として熱狂へと導いてしまう、生きることと切望することへの狂ったような思いについてなんです。僕は同時に、その全てのものなのです。僕が何者なのか、時々おわかりにならなくなると思いますよ。確実にね。不幸せにおいて果てまで行き、幸せにおいて度が過ぎる、そう言えばいいのかどうか。」

「では、同時に二つの舞台で演じているというわけかね？」[...]

ザグルーは長いこと黙っていたが、パトリスに目をやり、ただこう言った「君に愛情を抱く人たちには、ずいぶんと辛いことが待ちかまえているな。」そして、相手が急に立ち上がったのに驚き、口を閉ざした。顔が影に入って見えぬまま、メルソーは激しい口調で口にした「愛情を抱かれたって、何の義務もありはしません。」

ザグルーは答えた「確かにそうだね。だが僕にはわかるんだ。君はいつか、たった一人になってしまいうよ。それだけのことだ [...]」

引き続いて、『カルネ』の第2ノートには、その後『幸福な死』のテキストとして利用されることになる断章が間欠的に出現し、カミュがこの時期絶えず具体的に小説について考えていたことを伺わせる。とはいえ、「第1期の構想」のような、作品全体に関するプランの記述は現れない。作品のテーマが「幸福に生き、幸福に死ぬ」、とりわけカミュ的な意味においての「幸福な死を迎える」ということに据えられたのはよいとして、そのテーマの元では、8月に『カルネ』に記した一連の作品素材をそのまま扱えないことは明らかである。特に日常生活に取材した素材は「幸福な死」と

⁴⁸ その結果、この時カミュが構想していたであろう「クレール」という人物は姿を消すことになる。ただ「クレール」という名前そのものは、メルソーとともに「世界に向かう家」で牧歌的な共同生活を営む三人娘「クレール、ローズ、カトリーヌ」の一人の名前として用いられることになる。

いう一種秘教的なテーマとはつながりにくい。こうしてカミュは、8月に列挙した素材のうちどれを具体的に採用すべきか、そして新たなテーマの元にどのように選んだ素材を組み合わせる構成するか、という難題に突き当たったのだと思われる。そのため、全体の構想の練り直しは一度棚上げにして、場面場面のイメージをテキスト化しようとしたのではあるまいか。

断章2-003においては、アパートマンでうたた寝をしてしまった男の、わびしげな寝起きの場景が描かれている。これもこの時点で小説のどのような部分に用いようとしていたかは不明だが、最終的に、第2部第1章における、プラハの宿に投宿したメルソーについての描写として利用されることになった。

断章2-003 (PLII, p.835)

「男は汗にまみれて目を覚ました。服をはだけ、少しのあいだアパートマンの中をうろつく。それから煙草に火をつけ、腰を下ろすと、何も考えられずに、しわだらけになったズボンの折り目を眺めた。口の中には、眠りがもたらした苦みと煙草の苦みが溢れかえっている。まわりでは、自らの無気力でたわみきった時間が、水壺からあふれだしてくるかのようひたと音を立てていた。」

『幸福な死』第2部第1章 (PLI, p.1139)

メルソーは汗にまみれて目を覚ました。服をはだけ、少しのあいだホテルの部屋の中をうろつく。それから煙草に火をつけ、腰を下ろすと、何も考えられずに、しわだらけになったズボンの折り目を眺めた。口の中には、眠りがもたらした苦みと煙草の苦みが混じり合っている。シャツの上から両脇を搔きながら、男はもう一度部屋を見渡した。[...] まわりでは、自らの無気力でたわみきった時間が、水壺からあふれだしてくるかのようひたと音を立てていた。

10月に入ると「幸福を求め、幸福になる資格はあったのに、それを果たせない」ある男がそぼ降る雨の中を歩き続けるという描写が書き込まれる。内容から言って明らかに『幸福な死』で利用することを考えて記されたもののはずであるし、実際に第1部第4章でメルソーは雨に打たれるのだが、このテキストそのものは小説の原稿に採用されなかった。

断章2-012 (1937年10月2日) (PLII, p.838)

10月2日

「こぬか雨に打たれながら、男はぬかるんだ道を歩き続けた。数歩先までしかものが見えない。けれども男は、あらゆるものから遠ざかったこの小さな町をたった一人で歩き続けるのだ。全てのものから、そして男自身からも遠ざかった町を。いや、そんなことはできない。犬の前で涙を流し、人々の前で泣くことなんて。幸福になりたかった。幸福になる資格はあった。だが、それに値しなかったのだ」

この10月2日というのは、教員の口を見つけたカミュが、赴任地であるシッディ=ベル=アッベスという農村を訪れた日である⁴⁹。ところが実際に現地へ行ってみると、とてもこのような鄙びた

⁴⁹ 伝記『アルベール・カミュ』においてロットマンは「土曜日」としか書いていないが(第11章。(英) p.145, (仏) pp.159), 10月4日の日付のある断章2-013においてカミュはシッディ=ベル=アッベスからとんぼ帰りをしたことについての言い訳を「あの土地で陰鬱で無気力な生活を送るかと思うと二の足を踏んでしまったのだ」などと長々と記しており(PLII, pp.838-39), 4日の直近の土曜日は10月2日となる。

土地で暮らすのは耐えがたいと感じたらしく、翌日にはアルジェに戻る列車に飛び乗ってしまう。この断章は、その地において彼が感じた孤独感を反映しているのかもしれない。こうして定職に就く道を放擲してしまったことで、カミュは経済的不如意から逃れることができず、それが『幸福な死』の設定にも間接的に影響を与えていくのである。

とはいえ、このシッディ=ベル=アッベスでカミュは、アルジェリアの秋口における自然の素晴らしさを改めて痛感する体験を得たのだと思われる。10月18日に記された断章には、シッディ=ベル=アッベスから10キロ北方にあるシッディ=ブラヒムという地名とともに、イナゴ豆が秋の初めに花を咲かせ、それとともに官能的な香りをあたりに振りまく光景が感動的に描写されているからだ。そしてこのテキストはカミュにとってかなり貴重なものであったらしく、その後『幸福な死』第2部第4章の終盤でメルソーがアルジェリアの大自然と不思議な交わりを実現する場面に用いられ、さらに、エッセイ集『婚礼』に収められた「アルジェの夏」においても利用されることになるのである⁵⁰。

断章2-019 (PLII, p.840)

10月18日

九月になると、イナゴ豆の木々は、愛の匂いをアルジェリア全土に降り注ぐ。それはまるで、大地全体が、太陽に身を委ねた後、アーモンドの香りがする精液ですっかり濡れそぼったおなかを休ませているかのようだ。

シッディ=ブラヒムへ向かう道では、雨がりに、愛の匂いがイナゴ豆の木々から降ってくる。重苦しく、押さえつけるように、雨が残した水の重みの全てを伴って降ってくるのだ。それから日の光が、再びまばゆくなったその色合いの中に水分という水分を吸い込んでいき、愛の匂いは軽やかに、辛うじて鼻に感じられるくらいになる。それはまるで、暑苦しい午後がすっかり過ぎてから、一緒に通りに出かけた恋人が、街明かりと人々に囲まれながら、肩を寄せ、こちらを見つめているかのようだ。

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, p.1187)

夏の終わりには、イナゴ豆の木々は、愛の匂いをアルジェリア全土に降り注ぐ。夕暮れや雨の後などは、まるで大地全体が、太陽に身を委ねた後、アーモンドの香りがする精液ですっかり濡れそぼったおなかを休ませているかのようだ。一日中、その匂いは巨大な木々から、重苦しく押さえつけるように降り注いでいたのだ。この細い道では、日暮れになり、大地が和らいだため息を漏らすと、その匂いは軽やかな、辛うじてパトリスの鼻に感じられるくらいになるろうとしていた。それはまるで、暑苦しい午後がすっかり過ぎてから、一緒に通りに出かけた恋人が、街明かりと人々に囲まれながら、肩を寄せ、こちらを見つめているかのようだ。

10月20日になると、テキストとして『幸福な死』に利用されることはなかったが、そのテーマを浮き彫りにする重要な断章が現れる。この頃からカミュは、「第1期の構想」に盛り込まれたエピソードを「幸福の探求」と結びつける方策を具体的に探り出したのではなかろうか。

⁵⁰ 本論文第4章第3節を参照のこと。

断章 2-021 (1937年10月20日) (PLII, p.838)

10月20日

幸福への欲求と、粘り強い幸福の探求。憂鬱な思いをなにもかも捨て去る必要はない。けれども我々の中には廃棄すべき憂鬱な思いというものがある、それは困難なことや宿命的なものへの好みというやつだ。そうではなく、仲間たちとともに楽しく過ごし、世界との一体化を果たし、自らの幸福を獲得することなのだ。しかし、そのために辿る道は、死へつながるのであるが。

「死を前にしたら、あなたは震えてしまいますよ」

「ええ、けれど僕の使命の全てを作り出すもの、つまり生きるということから、何一つ欠けることにはなりませんよ」[...]

「幸福への欲求と粘り強い幸福の探求」は、作品全体のテーマに関わり、「廃棄すべき憂鬱な思い、困難なことや宿命的なものへの好み」というのは、『幸福な死』第1部におけるメルソーの抑圧され鬱屈した日々と重なるであろう。そして「仲間たちとともに楽しく過ごす」のは第2部第3章、「世界との一体化」は第4章、「幸福を獲得し、それが死につながる」というのは第5章と、ほぼ正確に照応していると思われる。こうしてカミュは、具体的な作品へとまた一つ歩みを進めたのであった。

2. 登場人物の展開

11月に入ると、重要な登場人物の姿が初めて現れる。両脚が切断されたために体が不自由という設定であり、これが作中のザグルーへとつながっていく（ただし、「体の片側が麻痺」という設定は捨てられる）⁵¹。この人物は、体の自由が利かなくなった今も、いや仮に障害がもっと重くなったとしても、生きることへの情熱、つまりは幸福への思いこそが自分の本質であると語り、そのテキストが小説の第1部第4章におけるザグルーのせりふにほぼそのまま用いられるのである。

断章 2-026 (PLII, p.842)

11月7日

登場人物。A.M. 体が不自由—両脚が切断されている—体の片側が麻痺している。

「僕は生理的欲求について助けてもらうんだ。きれいにしてもらい、ぬぐってもらい。耳も良く聞こえない。けれどね、人生を一度に縮めるような真似は決してしないよ。人生ってやつを信じ切っているのさ。もっとひどい目にあっても我慢するだろうよ。

『幸福な死』第1部第4章 (PLI, p.1126)

ザグルーは繰り返した「いいかい、こっちを見てくれ。僕は生理的欲求について助けてもらうんだ。きれいにしてもらい、ぬぐってもらい。さらに厄介なことに、そのために報酬を支払うのだ。けれどね、人生を一度に縮めるような真似は決してしないよ。人生ってやつを信じ切っているのさ。もっとひどい目にあっても我慢するだろうよ。目が見えなく

⁵¹ ロットマンは、「カミュは両脚を失って引退したある海軍軍医をモデルにした」と述べているが(第14章。(英) p.182, (仏) pp.197-99), それが事実だったとしても、体が不自由になったという設定に関してのみであろう。作中におけるザグルーは、明らかにメルソーの分身として位置づけられ、ザグルーとメルソーとの会話は、いわば「自己との対話」という様相を呈している。

目も見えなくなり、何の感覚も覚えなくなってもね。一口も利けなくなり、まわりと触れあうことができなくなってもね— このほの暗く、燃えさかる炎を体の中で感じさえすればそれでいいんだ。この炎こそが僕であり、僕は生きているんだ。人生が、まだ燃えることができるようにしてくれたんだから、人生のことがまだありがたいんだよ。」

なり、口が利けなくなろうが、なんだろうがね。このほの暗く、燃えさかる炎を体の中で感じさえすればそれでいいんだ。この炎こそが僕であり、僕は生きているんだ。人生が、まだ燃えることができるようにしてくれたんだから、人生のことをありがたいとしか思わないよ。」

また、11月13日に記された断章では、一時期カミュの主治医であったスタニスラス・クヴィクリンスキーのこぼれを書きとめている。クヴィクリンスキーは作中では医師ベルナルのモデルとなり、このメモは、第2部第4章におけるベルナルの台詞に用いられることになる。

断章2-028 (PLII, pp.842-43)

11月13日

クヴィクリンスキー「僕はずっと、恨みがましい思いでふるまってきた。今ではかなりましになったけれどね。幸福になれるようにふるまうかだつて？身を落ち着けるとしたら、むしろ気に入っている土地に住むことにするかだつて？けれど、感覚的に前もって予想をすると、必ず間違ふものだよ。必ずね。だから、もっともたやすく暮らせるようなやり方で暮らすべきなんだ。無理をしてはいけない。たとえそれで傷つくことになっても。それはややシニカルな考え方だよ。けれどもそれはまた、この世でいちばん美しい娘がものを見る見方でもあるんだ。」
[...]

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, p.1184)

しばらくしてから、ベルナルは付け加えた。

「僕はずっと、恨みがましい思いでふるまってきた。今ではかなりましになったけれどね。以前は、幸福になりたかったし、なすべきことをなしたかったし、例えば、自分の気に入った土地に身を落ち着けたいと思ったね。けれど、感覚的に前もって予想をすると、必ず間違ふものだよ。必ずね。だから、もっともたやすく暮らせるようなやり方で暮らすべきなんだ。無理をしてはいけない。それはややシニカルな考え方だよ。けれどもそれはまた、この世でいちばん美しい娘がものを見る見方でもあるんだ。インドシナでは、僕は至る所に行ってみた。ここでは、同じ所をうろろろするだけさ。ただ単にね。」

この頃再び取り上げられたのが、8月の断章1-123に記された「金銭の獲得」というテーマである。だが1-123においては「生きるために金銭を得る」ということだったのが、「幸福になるためには金銭が不可欠」という公式に変化するのだ。暮らしのために金銭を稼ごうと時間をすり減らしていると、幸福の探求のために費やす時間がなくなってしまう。それゆえ何らかの手段で十分な金銭を獲得することが幸福への第一歩だという理屈である。

大学卒業後にカミュはさまざまな臨時雇いの仕事を転々としていたが、前述のようにせつかくの教職のポストも棒に振ったために、この時期、就職先について真剣に悩んでいたらしい⁵²。生活の糧を得ることに忙殺されて本当に自分が行いたい文学の世界に打ち込むことがままならないという焦りが、こうした発想につながったのかもしれない。

⁵² そのような状況にありながら、この時期のカミュは演劇活動も継続しており、12月にはフェルナンド・デ・ロハスの『ラ・セレスティーナ』を「仲間座」で上演している。また、その12月初めには気象学研究所で気象データを整理するという仕事に就くことができ、『幸福な死』の原稿は、この仕事をしながら執筆されることになる。

11月17日に記された断章2-030においては、冒頭で第三部について言及された後、第1部の構想へと戻り、「体の不自由な男」が幸福と金銭の必要性について述べたことばについて、自宅に戻ったメルソーが同意を覚えると記されている（その部分は、『幸福な死』の第1部第5章で描かれる）。そして、続けて記されている金銭と幸福とに関する考察が、小説の第1部第4章におけるザグラーの台詞として利用されることになるのである。

断章2-030 (PLII, pp.843-44)

11月17日

「幸福への意欲」

第三部。幸福の実現。

数年間。四季の移ろいの中で時が過ぎる。それだけだ。

第1部（最終部分）。体の不自由な男がメルソーに語る「金銭。金がなくても幸福を手にするなんて考えを抱こうとするなんて、一種の精神的な俗物根性が原因なのだよ」

Mは、自宅に戻ると、そうした事柄の光に照らして自分の人生で起きた事柄を確かめる。答えは「その通りだ」

「しかるべく生まれついた」人間にとって、幸福になるとは、万人の運命を、諦めへの意志ではなく、幸福への意志によって生き直すということだ。幸福を実現するためには、時間が必要なのだ。多くの時間が。幸福もまた、長い忍耐の後に手にできるものなのである。そして時間について言えば、金銭を得る必要があるから時間が奪われてしまうのである。時間は購われるものなのだ。全てが購われるのだ。金銭的に豊かになるとは、幸福になる資格のある場合に、幸福になるための時間を獲得することなのである。

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, pp.1163-64)

ザグラーは語り始めた「僕には確信があるね。金銭を持たずして幸福になることはできない。これで決まりだよ。気楽な考えも、夢想的な思いもごめんこうむるね。納得できないことは我慢ならないんだ。それで気が付いたのは、ある種のエリートどものあいだには、金がなくても幸福を手にする可以考虑、一種の精神的な俗物根性があるということなんだ。馬鹿げているし、間違っているし、ある意味で、卑劣な考え方だよ。」

「なあ、メルソー、しかるべく生まれついた人間にとって、幸福になるとは少しもややこしいことじゃない。万人の運命を、幸福への意志によって生き直せばそれで充分なのさ。あんなにも多くの偽物の偉人たちは、諦めへの意志によってそうしようとしているんだがね。ただ、幸福を実現するためには、時間が必要なんだよ。多くの時間がね。幸福もまた、長い忍耐の後に手にできるものなのだよ。けれどもたいていの場合、金銭によって時間を獲得しなければならぬということに、金を稼ぐために時間をすり減らしてしまうんだ。そいつが、僕が関心を引かれたことがあるただ一つの問題だというわけだよ。はっきりとしている問題だ。明確なんだよ。」[...]

「ああ！ 金を持っている連中のほとんどが幸福への感覚などまるで備えていないことはわかっているさ。でもそいつは大したことじゃない。金を手にするとは、時間を手にすることだよ。その考えに僕はこだわるね。時間は購われるものだよ。全てが購われるのだよ。金銭的に豊かであるとか、そうなるとかは、幸福になる資格のある場合に、幸福になるための時間を獲得することなのだよ。」

ザグラーのこの長口舌は、かつて自らが財をなすために刻苦したことの理由が、物欲ではなく、幸福の探求という崇高な目的のためであったのだという説明であるとともに、だからその目的を果たすことができなくなった自分から金を奪い、自分の代わりに幸福の追求への道に挑んで欲しいとメルソーに示唆する役割も果たすことになる。

メルソーとザグラーのこの対話は、ザグラーが隠遁生活を行っている郊外の邸宅で行われたが、邸宅まで来る途中でメルソーは雨に打たれながら歩き、辿り着いた後はザグラーの部屋の窓から雨雲を眺めると描写されている。12月に記された断章2-032がその部分における原型となっている

のだが、ここで「ザルツブルクにて」と記されている点が興味深い。先に述べたように1936年の中欧旅行の際、カミュはザルツブルクにおいて医師から妻シモーヌへの手紙を発見し、二人がただならぬ関係にあったことを読み取って、妻との激しい諍いを起こしてしまった。そのことがその後の旅行全体に暗い影を落とし、遂にカミュは一人で訪れたプラハでパニック障害に陥ってしまう。その体験がエッセイ「魂の中の死」元となるが、ザルツブルクでの事件そのものはもちろん描かれていない。このプラハにおける痛切な体験をカミュは『幸福な死』において再び取り上げ、第2部第1章の全体をそれに充てるが、やはりザルツブルクについては全く言及されない。12月のこの時点では、あるいはメルソーの旅をプラハではなくザルツブルクから始めることが構想されていたのだろうか。もしそうならば、この断章は最初はザグラー邸における描写のために書かれたものではないということになる。

断章2-032 (PLII, p.844)

12月

大きな雨粒が油のように窓ガラスを覆い、馬の蹄が虚ろな音を立て、しをつく雨音が鈍く執拗に響いていた。それら全てが過ぎ去った日々の面立ちを示し、それにかき立てられた重い憂鬱の気持ちが、雨水が濡れた靴にしみこむのと同じく、寒さがズボンの薄い布で辛うじて守られた膝に染みこむのと同じく、メルソーの心に染みこんでいくのであった。まさに空の奥底から、黒い雲が絶え間なく姿を現し、ほどなく姿を消すと、また次の雲がやってくるのだ。霧とも言えず雨とも言えず、いわば大気と混ざり合って振り落ちてくるこの水分が、軽やかな手つきのようにメルソーの顔を洗い流し、大きく見開かれた両目をむき出しにさせるのであった。ズボンの折り目は失われていた。そして同じく失われているのが、自分のために形作られた世界においてふつうの人ならば身にまとっている、あの暖かみとあの自らへの信頼だったのだ。

(ザルツブルクにて)

『幸福な死』第1部第4章 (PLI, p.1125)

大きな雨粒が油のように窓ガラスを覆い、馬の蹄が今では馬車の立てる音よりもはっきりと聞こえる虚ろな音を立て、しをつく雨音が鈍く執拗に響いていた。暖炉のそばには置物のような人物がいて、部屋の中には沈黙が立ちこめている。それら全てが過ぎ去った日々の面立ちを示し、それにかき立てられた重い憂鬱の気持ちが、ついさっき雨水が濡れた靴に染みこんできたのと同じく、寒さがズボンの薄い布で辛うじて守られた膝に染みこんだのと同じく、メルソーの心に染みこんでいくのであった。ここへ来る少し前、霧とも言えず雨とも言えず、いわば大気と混ざり合って振り落ちてくる水分が、軽やかな手つきのようにメルソーの顔を洗い流し、大きく見開かれた両目をむき出しにさせたのであった。今メルソーは窓から空を目にしているが、その奥底から、黒い雲が絶え間なく姿を現し、ほどなく姿を消すと、また次の雲がやってくるのだ。ズボンの折り目は失われていた。そして同じく失われているのが、自分のために形作られた世界においてふつうの人ならば身にまとっている、あの暖かみとあの自らへの信頼だったのだ。

続く断章2-033では、メルソーの恋人であり彼をザグラーに引き合わせる役割を務めるマルトについてひと言が記され⁵³、2-034では、テキストそのものは直接利用されないものの、第1部第2章におけるメルソーの日常のアウトラインとおぼしきものが記されている。

⁵³ 第2部で述べるように、マルトのモデルは明らかにシモーヌである。

断章 2-033 (37年12月) (PLII, p.844)

マルトについて皮肉なこと — 彼女を捨てる。

断章 2-034 (37年12月) (PLII, p.844)

将来を大いに囑望されながら、今は事務所で働いている人物。その男がすることといえば、仕事から帰ると横になり晩飯の時間まで煙草を吹かすことであり、食事が終わればまた横になって翌日まで眠ることだけなのだ。日曜には、寝坊をした後窓辺に行き、雨や日の光や通行人を黙って眺めるだけだ。一年中こんなふうなのだ。そいつは待っている。死ぬのを待っているのだ。将来の可能性など何になろう。なぜならどちらにしたって...

作中でもメルソーは、退屈な仕事に埋没しながら鬱屈した日々を送り、日曜日にはぼんやりと窓から街灯を眺めて一日を過ごす(第1部第2章)。そしてよく知られている通り、その日曜の光景をカミュは『異邦人』におけるメルソーの描写として利用することになる。

ところで主人公メルソーの恋人は、実際には8月に記されていた断章1-048においては「リュシエンヌ」とされていた。そして彼女が「不貞を働いたことを語り」、主人公が性的な嫉妬の駆られ、舞台がザルツブルクとプラハになっていることから、明らかにリュシエンヌのモデルはカミュの最初の妻にして「ファム・ファタール」だったシモーヌであり、作者は自らの痛切な体験をかなり直接に小説に盛り込もうとしていたことがわかる。だが小説の構想を練り直していく過程で、カミュは告白に身を委ねるよりも想像力の展開の方が重要だと気が付いたのであろう。プラハにおけるパニック体験の描写は残されたものの、メルソーが恋人に対して覚える性的な嫉妬は完全にフィクションの形を取って、中央ヨーロッパにおける旅とは全く無関係になり、第1部のアルジェにおける出来事となった。そして彼女の名前は「リュシエンヌ」から「マルト」へと変更されるのである。

ところがカミュは、第2部においてメルソーの妻となる女性を導入し、そちらに「リュシエンヌ」の名前を付与した。リュシエンヌは不貞とは無縁であり、メルソーの意図に常に従順に従い、終幕における彼の病死を看取る。いわば「シモーヌにかくあってほしかった」という理想的な願望を反映させたのであろう。『幸福な死』第2部第3章では、その新たなリュシエンヌとメルソーとの幻想的なラブシーンが回想形式で描かれているが、その原型となったのが37年12月に記された断章2-038である。(引用文中のゴシック強調は筆者)

12月

男が感動を覚えたのは、その女が服にしがみついてきて、腕を押しつけながら男に従ってくるその仕方であり、身を任せ信じ切るその姿であり、それが自分の中の男というものに触れてくるのであった。女の沈黙もまた、その瞬間の動きに見事に合致していて、女は完璧に猫に似た姿となり、その姿が、口づけをする時の重々しさと一緒になるのであった。

夜に包まれ、指の先に冷え切って突き出た頬骨を感じ、生ぬるい暖かみをした唇を感じ、その唇に指が押しつけられていくのであった。その時自分の中に生じたのは、報いを求めず熱を帯びた、大きな叫び声だった。夜は、ばちばちを音を立てるかのような星で一杯であり、街はといえば、星空をひっくり返したかのように人が作る明かりであふれかえり、港から街のおもてへと暖かく深い吐息が吹き付けている。そんな中で湧き上がってきたのは、この生暖かい泉を飲み干したいという思い、この生きた唇から、人間的なものを捨て眠り込んだこの世界のあらゆる秘密をつかみ取り、この口から、閉じ込められた沈黙をつかみ取りたいという、我を忘れた欲求だった。男は顔を傾けた。それは小鳥の唇に顔を寄せるかのようなようだった。マルトは呻いた。その唇をむさぼる。そしてしばらく、唇と唇を合わせたまま、腕に世界を抱きかかえるかのように、うっとりときせるその生暖かさを吸い込んだ。けれど女は、男にしがみついたまま、水に溺れたかのようになるが、投げ込まれたその深くほみからすぎさま立ち戻り、また唇を押しつけてくると、次いで引き離し、再び冷え切った真っ暗な水の中に落ちていき、そこで燃え上がる姿は、神々の民のようであった。

それまでメルソーが感動を覚えていたのは、リュシエンヌが服にしがみついてきて、腕を押しつけながら男に従ってくるその仕方であり、身を任せ信じ切るその姿であり、それが自分の中の男というものに触れてくるのであった。リュシエンヌの沈黙もまた、その瞬間の動きに見事に合致していて、彼女は完璧に猫に似た姿となり、その姿が、あらゆる動きにおける重々しさと一緒になるのであった。昨夜、ディナーを済ませてから、メルソーはリュシエンヌと波止場をぶらついた。少しして、二人は立ち止まり大通りの手すりに寄りかかった。リュシエンヌがするっと身を寄せてくる。夜に包まれ、メルソーは指の先に冷え切って突き出た頬骨を感じ、生ぬるい暖かみをした唇を感じ、その唇に指が押しつけられていくのであった。その時自分の中に生じたのは、報いを求めず熱を帯びた、大きな叫び声だった。夜は、ばちばちを音を立てるかのような星で一杯であり、街はといえば、星空をひっくり返したかのように人が作る明かりであふれかえり、港から街のおもてへと暖かく深い吐息が吹き付けている。そんな中で湧き上がってきたのは、この生暖かい泉を飲み干したいという思い、この生きた唇から、人間的なものを捨て眠り込んだこの世界のあらゆる秘密をつかみ取り、この口から、閉じ込められた沈黙をつかみ取りたいという、我を忘れた欲求だった。メルソーは顔を傾けた。それは小鳥の唇に顔を寄せるかのようなようだった。リュシエンヌは呻いた。その唇をむさぼる。そしてしばらく、唇と唇を合わせたまま、腕に世界を抱きかかえるかのように、うっとりときせるその生暖かさを吸い込んだ。けれどリュシエンヌは、メルソーにしがみついたまま、水に溺れたかのようになるが、投げ込まれたその深くほみからすぎさま立ち戻り、また唇を押しつけてくると、次いで引き離し、再び冷え切った真っ暗な水の中に落ちていき、そこで燃え上がる姿は、神々の民のようであった。

ここで興味深いのは、断章2-038の方では恋人の名前が「マルト」となっていることである。それゆえ「マルト」は当初「理想の恋人」の方の名前として着想されたのかもしれない。その後「リュシエンヌ」と名前が交換されて、「マルト」は「不実の恋人」の役割を担う名称とされたのであろう。

3. 最終的な構想

『カルネ』の第2分冊には、その後、『幸福な死』と直接の関わりを持つ断章が3つ現れる。これらは日付エントリーを備えていないため、記されたのが37年12月なのか翌38年1月になってから

なのか厳密な特定はできないが、小説の最終的な構想は集中的に練られたであろうから、おそらく12月中のことと考えられる。

【断章 2-043】（1937年12月～38年1月）（PLII, p.848）（ゴチック強調は筆者）

小説。第1部。

郊外の田園地帯にあるザグラーの邸宅。殺害。室内は暖房が効きすぎている。メルソーは耳に血が上るのを感じ、息苦しくなる。帰り際に風邪を引く（そこから病気になる、そのせいで命を落とす）。

第4章。ザグラーとの対話が「没個性」を巡って始められる。

「そうだね。けれど仕事に就きながらそんなことをしようだなんて無理な話だろ」とザグラー。

「無理ですね。それは僕が物事に逆らうという在り方でのことです。そいつがまずいんですよ」

「つまるところ」とメルソーは言う「頭に血が上っていて、危ないことをやりかねないんですよ」

ここで初めてザグラー殺害というモチーフが出現する点が重要である。実際の作品の流れと照合すると、おそらくは11月の断章 2-030の時点ですでに、「体が不自由な資産家をその同意の下に殺害して財産を奪いそれによって幸福の探求に乗り出す」という着想を得ていたと思われるが、断章 2-043の時点になってようやくそのことが明示されるのだ。こうして小説の構想には、8月の「第1期の構想」にはなかった全く新たな要素を導入され、次の段階へと大きな変貌を遂げたのである。「資産家の殺害→金銭の奪取→時間の獲得と幸福の探求→幸福の実現と幸福な死」という流れに基づくこのプランを、「第2期における構想」と呼ぶことにしよう。

なお、ザグラー邸の室内で暖房が効きすぎたために汗をかき、邸から逃げる際に体を冷やして風邪を引くというのは小説の中でもその通りとなったが、メルソーの死亡はそれから数年も経ってからのことであり、風邪が直接の原因となるわけではない。また、「そうだね～まずいんですよ」の二行の会話は、断章 2-001を元にした、第1部第4章のザグラーとメルソーの会話に挿入する形で利用されている（PLII, pp.1128-29）。

大いなる目的のために人を殺害して金銭を奪うというプロットから連想されるのは、当然ドストエフスキーの『罪と罰』であろう。選ばれた存在は犯罪すら許されるという妄想を抱いたラスコーリニコフと、殺人を犯しても自らを無垢な存在と信ずるメルソーには、明らかに文学的血脈が認められる（ただし、ロシア青年が凶行を働いたのは社会に役立つことを目指したからだったが、アルジェリアの若者の場合は「幸福の探求」という個人的な目的のためである）。だが興味深いことに、カミュは若い頃からドストエフスキーに傾倒し、晩年には『悪霊』の翻案まで行ったというのに、彼のエッセイや批評を通覧しても『罪と罰』という書名がほとんど見つからないのである（特に、『カルネ』においては一度も言及されていない）。あのロシアの大作家を尊敬していたにもかかわらず、あるいは尊敬していたからこそ、影響を受けたことを隠そうという恥じらいの感情が生じていたのだろうか。

「第1期の構想」においては、その素材のほとんどがカミュの実人生を反映したものとなってい

だが、「第2期における構想」ではこうした虚構の要素が大幅に導入され、断章1-118に記された当初の第1部の要素はほとんどが捨てられる。そして作品は、当初の第2部から抜粋された実体験に基づく要素と新たな仮構的要素のアマルガムのような状態に変化したのである。例外的に「第1期の構想」のものをほぼそのまま引き継いだのが、第2部第3章における「世界に向かう家」の描写であり⁵⁴、中央ヨーロッパへの逃避旅行から戻った主人公メルソーは、その家でクレール、ローズ、カトリーヌという三人の女子学生に囲まれて、いわば精神的なハーレムの生活を営む⁵⁵。第4章でメルソーは「世界に向かう家」を去り、郊外のシュヌーアという土地に居を定めると、リュシエンヌと「通わせ婚」の形で結婚する。断章2-044は、その三女子学生がシュヌーアを訪ねてきたときに、中のカトリーヌとメルソーが交わす会話の原型となったものである（三人の中でもカトリーヌはメルソーに恋心を抱いている存在として位置づけられていた）。

断章2-044 (PLII, p.848)

小説。第4部。受け身の女。

Mは口を開いた「間違っているのは、なにかを選ばなくてはいけない、したいことをしなければいけない、幸福のためには条件がある、などと思いつくことだよ。幸福というのは、あるか、ないか、というものさ。大切なのは、幸福への意欲だよ。いわば、大いなる意識を常に備えていることだよ。それ以外のこと、女とか、芸術とか、世間での成功とかは、どれも言い訳にすぎないのさ。刺繍されるのを待っている布地みたいなものさ。」

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, p.1182)

カトリーヌは口ごもった「奥さんのことを愛しているの？」メルソーはにこりとした。カトリーヌの肩を抱き、その頭を揺さぶって、顔に水を浴びせた。「間違っているのはね、カトリーヌちゃん、なにかを選ばなくてはいけない、したいことをしなければいけない、幸福のためには条件がある、などと思いつくことだよ。幸福というのは、あるか、ないか、というものさ。大切なのは、幸福への意欲だよ。いわば、大いなる意識を常に備えていることだよ。それ以外のこと、女とか、芸術とか、世間での成功とかは、どれも言い訳にすぎないのさ。刺繍されるのを待っている布地みたいなものさ。」

続く断章2-045は、その第2部第4章冒頭の原型を構成することになるテキストである。こうして、小説第2部における「中央ヨーロッパへの旅→「世界に向かう家」での牧歌的な生活→シュヌーアに引きこもっての幸福の探求」というアウトラインがこの時期に形成されていたことがうかがえる。

⁵⁴ 断章1-048の記された当初の第2部の構想においては、第1章～第5章のAすべてが「世界に向かう家」に充てられており、かつ、そこで記されている素材がすべて『幸福な死』の第2部第3章で描かれている。それゆえ「世界に向かう家」のエピソードは、小説における最も深い位置にある地層を形成しているのである。

⁵⁵ このエピソードは、カミュの実体験を大きく反映している。

小説。第3部。

それからしばらくして、メルソーは別れを告げた。まず旅に出かけ、それからアルジェの郊外に住まいを見つけた。ひと月してからまた戻ってきたが、旅というものが自分にとって閉ざされた暮らしを意味するということに確信があった。旅は実際にそうであるところのもの、つまり落ち着かない人間にとっての幸福であると思われたのである。それは、メルソーが意識的な至福を探求する中で求めているものではなかった。それに、体調が思わしくないと感じ、しなければならぬことが分かっていたのだ。もう一度、メルソーは「海に向かう家」に別れを告げる支度を始めた。

ひと月前、メルソーは「世界に向かう家」に別れを告げた。まず旅に出かけ、それからアルジェの郊外に住まいを見つけた。何週間かしてまた戻ってきたが、旅というものが自分にとって閉ざされた暮らしを意味するということに確信があった。旅における違和感というのは、落ち着かない人間にとっての幸福であると思われたのである。それに、何か理由のわからない疲労感を覚えていたのだ。

だが、「第1期の構想」においては小説は三部構成の計画であった。これがどのようにして現在見る二部構成へと変容したのであろうか。『カイエ・アルベール・カミュ1』において『幸福な死』の校訂を行い注解を行ったジャン・サロッキは、「『幸福な死』の成立過程」*« Genèse de La Mort heureuse »*という短い論考を同書に収めているが⁵⁶、『カルネ』とは別に記された草稿資料の中に、カミュが記した次のようなプランが見つかったと述べている⁵⁷（ただし、いつ頃の時期に記されたものなのかは残念ながら不明である）。

- 第1部 1: 貧しい地区 2: パトリス・メルソー 3: パトリスとマルト 4: パトリスとその友人たち (?)
 (線で消されていてほとんど読めない) 5: パトリスとザグラー
- 第2部 1: ザグラーの殺害 2: 不安の中の逃亡 3: 幸福への回帰
- 第3部 1: 女たちと太陽 2: ティパサにおける秘密の、そして燃えるような幸福 3: 『幸福な死』

サロッキによれば、37年8月以来の「三部構成」という発想を捨ててカミュが作品を二部構成としたのは、かなり後になってからのことだという（サロッキはその時期を特定していないが、先に引いた断章2-043においては、ザグラーとメルソーの会話の原型を記しつつ「第4章」と書かれている。『幸福な死』においてザグラーとメルソーの会話が交わされるのが実際に第1部第4章だから、2-043の時点ではすでに最終的な構成が固まっていた可能性がある）。その作業の際に、カミュは上記のプランを次のように再構成したことになる。

⁵⁶ サロッキによる草稿の検討と異文注解は詳細を究めており、資料的価値が極めて高い。これがプレイヤッド新版に再録されなかったのは非常に残念であるとともに、再録されなかったことの原因が不明である。他方、『『幸福な死』の成立』の方は、入念な草稿の検討を行った研究者の手になるものとしては意外に粗雑な論考であることが惜まれる。

⁵⁷ CAC1, p.14.

第1部		第2部	
第1章	2-1	第1章	2-2
第2章	1-2, 1-4	第2章	2-3
第3章	1-3	第3章	3-1
第4章	1-5	第4章	3-2
第5章	(1-1 ?)	第5章	3-3

こうしてカミュが辿り着いたのは、明確に前半を「幸福の探求へ向かう以前のメルソーの姿」、後半を「幸福の探求に没入するメルソーの姿」となす構想であった。それゆえ、ザグルー殺害が小説を大きく展開させる結節点となり、そこで物語を分割させる必要が生じた。そのザグルー殺害のシーンを冒頭に位置づけたのは小説に劇的な効果をもたらすことを狙ったものであろう。だが、8月の断章1-118に記されたような主人公の日常に関する当初の素材はほとんど捨ててしまったために、第1部のテキストの分量は第2部に比べてかなり薄くなり、プレイヤード版のページ数に換算して第1部は33ページ、第2部は59ページという不均衡な結果となっている。

これまで見たように、間接的あるいは直接的に『幸福な死』に関連するメモは『カルネ』第1分冊の中盤から第2分冊の断章2-045にかけてびっしりと記されてきたが、これを境に『カルネ』からは姿を消すことになる。また、それ以外の『カルネ』への書き込みもしばらくのあいだごくわずかとなり、断章2-45から2-46にかけては、なんとほぼ2ヶ月間の空白が生じている。こうした事実は、構想の期間は過ぎ去り、この期間は実際の小説の執筆にカミュが没頭していたことを物語っているだろう。作品が一応の完成を見たのがいつなのかを物語る決定的な証拠はないが、4月の日付がある断章2-051には新たな計画が記されていることから考えて、また次章において述べるさまざまな事情から、カミュが集中的に執筆を行ったのは37年12月後半から38年3月頃にかけてではないかと推測されるのである⁵⁸。

第4章：発表の断念と部分的な再生

1. 批判に直面して

『幸福な死』は、「ルイ・ランジャール」をまともに構築できなかった若きカミュが、大いなる文学的野心の元に一応の完成まで漕ぎ着けた最初の小説であった。とはいえその出来映えにはあまり自信が持てなかったというふしがある。そこで親しい友人や恩師たちに原稿を見せて感想を求めていったらしい。

ロットマンによれば、カミュの女友達の一部ブランシュ・バランは進行中の原稿を1月に読ませてもらったが、日記に次のように記したと言う。ただし、これはあくまでも文体やテーマについての感想であり、まだ小説が未完成だったこともあり、全体の構想が孕む問題点については述べられていない。

⁵⁸ ただしこの間のカミュは、『仲間座』において2月末にシャルル・ヴィルドラックの『商船テナシティ』とジッドの『蕩児の帰還』を上演しており、1月からそのための準備に入っている。

これは風変わりな作品だ。主題は恐ろしく、奇妙で、残酷であり、さまざまな意味に満ちている... 見事に書かれているし、こちらをわしづかみにするような雰囲気によって力強さを備えている。時おり読むのが辛くなるようなページもいくつかあった — この難しくてシニカルな物語には、苦悩が潜んでいる⁵⁹。

他方、アルジェ大学時代の恩師ジャック・ウルゴンは（恐らくは完成した原稿を読んで）、齒に衣を着せぬ批評を下したとロットマンは伝える。「荒々しいリアリズムや（主人公の犯す）犯罪は、文学性を狙った箇所テキストとうまくかみ合っていない。これではまるで、モンテルランの作品を下しくそに真似たかのようだ⁶⁰」。ロットマンはまた、『幸福な死』のタイプ原稿を作成したクリスチャーヌ・ガランドーが「ウルゴンと話したあとのカミュに出会ったところ、がっかりした様子だった」とロットマンとのインタビューで述べたと伝えている⁶¹。

高校の最終学年における哲学クラスの担当であり、アルジェ大学においても教えを請い、カミュが生涯にわたって「師」と仰ぐことになるジャン・グルニエも、『幸福な死』の原稿に対して手厳しい評価を行ったらしい。グルニエの批評についてはロットマンも、オリヴィエ・トッドによるもう一つの評伝も伝えていないが、カミュが1938年6月18日にグルニエに送った書簡を読むと、恩師の批評がどのようなものであったが十分に推測される。

先生のおっしゃることは、今日、まったくその通りだと思われまふ。この本にはとても苦労しました。毎日、仕事を終えてから、何時間も書いたのです。最後まで、一行たりとも読んでもらったことはありません。そして、これがもう遠いものとなってしまった今、深く考えなくてもわかるのです。僕は自分に溺れ、物が見えなくなり、多くの箇所で、語るべきことではなく、語るのが楽しいことを先にしてしまったのです。僕にとって残念なこと——このテーマにとっても残念なことです。それは今日、かくも心にこびりついているのですから。[...] ただ、仕事にまた取りかかる前に、先生にお尋ねしたいことがあるのです。忌憚なくおっしゃってくださることができるのは、先生だけです——僕がものを書き続けるべきだと、心からお考えでしょうか？ [...] ⁶²

「(この本が) もう遠いものとなってしまった *j'en suis éloigné*」と記されていることから、『幸福な死』が完成を見たのは6月よりもかなり以前のこと考えられる。また文章の内容から、カミュが原稿をグルニエに見せたのもこの手紙の日付よりもずいぶん前のことであり、カミュは恩師から批判を受

⁵⁹ ロットマン, p.187 (仏), p.171 (英)。

⁶⁰ 同上。原著の注によれば、これはロットマンが直にウルゴンにインタビューした際に聞いたことばである。

⁶¹ またロットマンは、クリスチャーヌがタイプ原稿を作成したのは4月頃ではないかと推測している。同上。

⁶² 『カミュ・グルニエ往復書簡』 *Albert Camus - Jean Grenier Correspondance 1932-1960*, Gallimard, 1981, p.29, 書簡第18。この手紙の全文はp.28からp.32にまで及ぶ。なお、カミュは1939年10月に、それまで自分が受け取っていた手紙類をすべて処分したので (マルグリット・ドブレヌによる『往復書簡』の序文を参照。p.10), この時期のグルニエからカミュへの書簡は現存せず、カミュからの手紙の文面から想像するしかない。この往復書簡集にグルニエからの手紙が現れるのは、1940年8月の書簡第27からである。

けた後にいろいろと悩み、苦しみ、ようやく発表を断念するという思い切りを付けてからこの書簡をしたためたのではないかと思われる。そしてカミュは、文中にあるように、自らの作家としての才能を深く疑うところにまで追い詰められ、グルニエに助言を仰いだのであった。

もう一つ、当時のカミュの苦悩を物語る極めて重要な資料が存在する。これは『カルネ』のノートとは別のノートに飛び飛びに記されたテキストで、長くその存在が知られていなかったそのノートが発見されて、新プレイヤッド版カミュ全集に資料として収録されたものである。このノートについては拙論「カミュ「作品系列」構想の起源と変遷」において詳しい解説を行ってあるのでそちらを参照して頂きたいが⁶³、その5ページ目に« Sans lendemains »と記されていることから、この資料のことを「ノート・明日などはない」と呼ぶことにする。その冒頭のテキストには「1938年3月17日」という日付が付され、異様に生々しい自殺願望に若きカミュが取り憑かれ、自動車へ向けて身を投げる衝動にかられたという告白が吐露されているのである。

その日は、車の一台一台が、誘惑だった。車の車輪が僕にのしかかってくるのが見えた——僕の体は動かなかったけれど、その体の中で、もう一人の存在が向かおうとしていたのは、僕を押しつぶしかねない、魂を持たぬあの車という力へ向けてなのだった。町という町で、僕は、いっしょに人間らしい行いができる人を探していた。コーヒーを飲むとか、女に笑いかけるとか、映画館に入るとか。だが人々は、癩病患者を避けるものだ。だから癩病患者が誰も見つけられないとしても、それは当たり前のことなのだ。[...] この一日がどのようなものだったかを示すのは、落ち込んでいた果てしもない絶望と狂気を示すのは、やっとのことなのだ。これから述べることで最も大切なのは、その夕暮れの瞬間、思い浮かべもせずに、死ぬという考えを受け入れたということ、生きた人間というよりも、刑を宣告された者としてものを考えていたということなのだ。⁶⁴

若きカミュはこの時期、なぜここまで深刻な精神的危機に追い詰められていたのだろうか。確かにそれまでの人生は順風満帆とまでは言えず、十代の後半に発病した結核、ごく若くして始めた結婚生活の破綻、大学を出ても定職が見つからず経済的不如意に苦しんだことなど、いくつもの原因が考えられる。だが、38年3月という時期を踏まえると、『幸福な死』に対する酷評に直面し自らの文学的才能に自信を持てなくなったことがひときわ大きな原因だったのではなかろうか⁶⁵。それを裏書きするように、このテキストはこの後、自らを鼓舞するような論調に転じ、文学的な思弁を重ねた末に、今後長期にわたってさまざまなタイプの作品をものにし、自らの作品体系と呼べるものを実現しようという壮大な計画が一覧表の形で導き出されるのである⁶⁶。直接の原因が文学的挫折

⁶³ 『人文社会科学論叢』第2号（弘前大学人文社会科学部）、2017年2月、pp.1-59。（特にpp.3-10）

⁶⁴ PLI. p.1198. 波下線による強調は筆者。

⁶⁵ ただしその場合は、ウルゴンやグルニエに原稿を見せたのは3月のこととなり、小説は2月末頃までにはほぼ完成していたことになる。むろん、見せたのは完成前の途中原稿だった可能性もある。

⁶⁶ PLI. p.1201.

であったからこそ、文学的再生を目指して、自らの精神を慰撫しつつ思索を重ねたというのが、「ノート・明日などはない」におけるこの文章の意味だったのではないだろうか。

エッセイ	演劇	小説
不条理, あるいは出発点	カリギュラ, あるいは死に至る演技者	自由な人間 (関心を示さぬ人間)
閉じられた世界 悲劇に関するエッセイ	ブジェヨヴィツェ, あるいは罰せられる演技者	ドーリア風のベスト
[渴望 ?] (N)	ドン・ジュアン	恋する男
死の神々	反ファウスト	癩病患者

この一覧表の第一列には、明らかに『シーシュポスの神話』、『カリギュラ』、『異邦人』の着想の萌芽が現れ⁶⁷、第二列には『誤解』と『ベスト』の出発点が記されている。そして3つの縦軸はそれぞれ「エッセイ、演劇、小説」の3つの分野に充てられている。後年カミュは、共通したテーマの元にこの3分野にわたって作品を著し、一つの「系列」としてまとめるという方針を立て、その実現のために文学的苦闘を重ねるが⁶⁸、その出発点こそ、この一覧表なのであった。

それほど重要な表の中に『幸福な死』の姿が全く見られないという点が、決定的な事実を物語っているだろう。すでにこの3月17日の時点で、カミュは『幸福な死』を断罪し、自らが構築したいと考えた作品系列の構想から除外してしまっていたのである。そして最終的に、『幸福な死』を作品として出版したいという願望も断念することになるのである。

2. その後の経過

4月になるとカミュは、断章2-051において作品制作のプランを記すが、『カリギュラ』への言及があることと、「二年後には1つの作品を書き上げる」という目標が掲げられていることから、「ノート・明日などはない」における構想を受けてこの断章を記したことは明白であろう。また2作のエッセイとは、後にエッセイ集『婚礼』に収められることになる「ジェミラの風」と「ティバサでの婚礼」を指していると考えられる⁶⁹。それをジャン・グルニエの元に送って批評を仰ごうとしていたのではなかろうか。

【断章2-051】 (1938年4月) (PLII, p.850) (下線部は原文でイタリック)

4月

エッセイを2作送付する。『カリギュラ』。少しも重要ではない。十分に練られていない。アルジェで出

⁶⁷ キヨによれば、「自由な人間」« Un homme libre »は、『異邦人』のサブタイトルの候補となった (PLT, p.1916)。

⁶⁸ その詳しい経緯と、そのためにカミュが繰り広げた生涯にわたる文学的苦闘については、やはり拙論「カミュ「作品系列」構想の起源と変遷」を参照されたい。

⁶⁹ 次節を参照のこと。

版すること。

再び取り組むこと「哲学と文化」。そのためには何もかも捨てること。

論文

「生物学とアグレガシオン（教授資格）」

あるいは「インドシナ」

毎日、このノートに書き込むこと。二年後には、一つの作品を書き上げる。

このように、この時期のカミュは『幸福な死』を過去のものとして封印し、次の文学的挑戦へと舵を切っていたと推測されるのである。とはいえ、この後も3つほど、『幸福な死』や「メルソー」ということばが記された断章が『カルネ』に出現する。主にそれらを根拠にして1938年の中頃もカミュは『幸福な死』の執筆を続けいたとか書き直しを行っていたとか、あるいは『幸福な死』の断念は1938年の秋頃ではないかという主張が行われることがあるが、これまでの分析から考えても、その可能性は極めて低い。それよりも最初に完成させた小説である『幸福な死』への未練を捨てきれず、仮に書き直すとしたらこういうシーンを加えると考えてみたか、メルソーという登場人物が現れる全く別の小説の可能性を考えてみたか、カミュがあれこれ逡巡した結果にすぎないと考えられるのである。

そのような、言わば残り火のような断章を列挙すると次のようになる。

【断章 2-060】（1938年6月）（PLII, p.852）

6月

『幸福な死』のために。別れを告げる一連の手紙。ありふれたテーマ：君を愛しすぎているからだ。

そして最後の手紙。明晰という点での傑作。けれどもそこでも、芝居の要素は測りがたい。

【断章 2-061】（1938年6月）（PLII, p.852）

終結部分。メルソーが酒を飲んでいる。

「おや！ 老けたねえ、メルソー」とセレストがカウンターを拭きながら口にした。

メルソーは不意に動きを止め、グラスを置いた。そしてカウンターの向こうにある鏡を眺めてみた。その通りだった。

【断章 2-071】（1938年6月～7月）（PLII, p.855）

『幸福な死』:

列車の中で、ザグラーが彼の前に腰を下ろす。ただ、いつも首に巻いている黒のスカーフではなく、とても明るい色をした夏向きのネクタイを締めている。（殺害の後、自分のアパートマンに戻る。何も変わってはいない。ただ、鏡を新しいものに取り替える）

断章 2-060は、メルソーがマルトと別れる部分の書き直しにつながるかもしれないし、2-061は第2部でシュヌーアに隠遁したメルソーが久しぶりにアルジェを来訪したシーンへの追加として利用できたかもしれない。しかし実際にはそのような書き直しは行われなかったし、仮に行われていた

としても、小説の内容に深く関わるものではない。断章2-071に至っては、両脚を切断されていたザグラーが列車の席に腰を下ろすことなどありえず、作品世界とはかけ離れている。

ところで38年6月には、カミュは断章2-063に、夏の間に行いたいと考えた計画を列挙している。

【断章2-063】（1938年6月）（PLII, p.853）

6月。夏の計画：

- 1) フィレンツェとアルジェを終える / 2) カリギュラ / 3) 夏の即興劇
- 4) 演劇に関するエッセイ / 5) 週40時間労働に関するエッセイ / 6) 小説を再び書く
- 7) 不条理

「フィレンツェ」がエッセイ集『婚礼』に収められることになる「砂漠」を指し、「アルジェ」が同じく「アルジェの夏」を意味することは明白であろう。カリギュラは実際にこの38年の夏に書き進められたらしいが、初稿が完成するのは39年の夏となる。7の「不条理」は明らかに『シーシュポスの神話』となるべき作品を指すが、実際の執筆に取りかかるのはずっと後のことになる。

そして6の原文が「*Récrire Roman.*」であることから、これを「小説を書き直す」ととらえ、「カミュが『幸福な死』の書き直しを考えていた（つまり、この時点ではまだ最終的な発表の断念を行っていなかった）」とする主張も散見されるが⁷⁰、これは明らかに、「もう一度小説の創作に取り組み、別の作品を書く」と解すべきである。カミュは実際、新たな小説の可能性についてこの後さまざまに考察を巡らす、なかなか明確な形を取らず、12月に入って不条理のテーマと小説を死刑囚の素材によって結びつけるというイメージを得た後⁷¹、1940年になってから集中して『異邦人』を執筆することになるのである。『異邦人』は素材もテーマも『幸福な死』とはほとんど関わりがなく、『幸福な死』は決して『異邦人』の前身などではないが、『幸福な死』の失敗があったからこそ、カミュは『異邦人』を手にできたのであった。いわば、『異邦人』という傑作を文学の広大な宇宙へ飛び立たせるための、発射台の役割を『幸福な死』は果たしたのである。

3. 再生されたテキスト

「ルイ・ランジャール」の試みに挫折した後、エッセイ集『裏と表』をまとめたのと軌を一にして、『幸福な死』の発表を断念したカミュは、なかばその代償行為のようにして、二作目のエッセイ集を編纂し、1938年の夏頃にシャルロ書店に原稿を渡す（諸般の事情から出版そのものは遅れて、1939年5月にずれ込んでしまった）。それが『婚礼』*Noces*である。この作品は、次の4つのエッセイから構成されている。

⁷⁰ 例えばロットマンはそのような示唆を行っているが、ロットマンらしからぬ的外れな指摘である。

⁷¹ 断章2-133（PLII, pp.871-72）。

「ティパサでの婚礼」« Noce à Tipasa »：アルジェ郊外にあるティパサはカミュが好んで訪れた土地であった。この地における大自然との一体感と生きることの歓喜を美しく描き出している。

「ジェミラの風」« Le Vent à Djémila »：ジェミラは、アルジェリアの北東、アルジェからおよそ300キロ離れたところにある古代ローマの遺跡である（現在は世界遺産）。カミュはアマチュア飛行家に連れられて1936年の夏頃にこの地を訪れており、その時の体験を元にエッセイを執筆した。

「アルジェの夏」« L'Été à Alger »：地中海の夏を背景に、カミュが愛して止まなかったアルジェの町の様相とそこに住む人々、とりわけ若者たちの生き生きとした姿を鮮やかに描き出し、そこから独自の文明論を語ったエッセイ。

「砂漠」« Le Désert »：第2章第3節で見た、1938年のイタリア旅行やその時の美術鑑賞について語り、さらにフィレンツェ郊外のフィエゾーレにおける感動的な精神的な高揚を想起しつつ、さまざまな考察を付け加えている。

これらのエッセイについては、『カルネ』が創作ノートとして用いられていないために、それぞれがいつ頃着想され執筆されたかについての直接的な証拠は得られない。しかし、これまで折に触れ見たように、次のような間接的な証拠ならば得られるのである。

- (1) 断章1-065（1937年4月）に、「遺跡に関するエッセイ」と記されている。（PLII, p.814）
- (2) 断章2-051（1938年4月）に、「2篇のエッセイを送付する」と記されている。（PLII, p.850）
- (3) 断章2-062（1938年6月）に、「アルジェの夏」というタイトルが記されている。（PLII, p.853）
- (4) 断章2-063（1938年6月）に、「フィレンツェとアルジェを終えること」と記されている。（PLII, p.853）

以上から、恐らく「ジェミラの風」が最も早く着想され、遅くとも1938年4月までに「ジェミラの風」と「ティパサでの婚礼」が完成されていたこと、他方「アルジェの夏」と「砂漠」の完成は1938年6月からほどなくしてのことだということ、などが見て取れる。

また、『幸福な死』の構想と執筆に没頭していた時期に同時並行でエッセイを書き進めることはできなかったであろうから、『婚礼』を形成する4つのエッセイのうち、2つは『幸福な死』に取りかかる前に執筆され、残りの2つは『幸福な死』の発表断念後に書かれたと考えられる。すなわち、エッセイ集『婚礼』は、時期的な意味で『幸福な死』を挟み込むように形成されたのであろう。それゆえ、『幸福な死』と『婚礼』との間で、関連するテーマやテキスト上の関連性について詳細な分析を行うのは重要な研究テーマと言える。ただしここでは、本論文全体の構成上、簡単な指摘を行うに止めておく。

4作の中で最初に書かれたと考えられる「ジェミラの風」においては、石造りのローマ時代の遺跡を散策し、そこを吹きすさぶ苛烈な風に吹かれ、むき出しの陽光に晒されるなか、語り手は自らの存在が溶解し、世界＝自然の一部となるという感覚を味わう。ここには、（幸福の観念はまだ関わってはいないが）、世界との一体化という、『幸福な死』における一つの主要テーマの萌芽が見取れるだろう。さらに、己をむなしくするという感慨から、語り手の思念は死に関する多角的な考察へと移行し、「意識的な死 des morts conscientes」という表現が現れる（PLI, p.114）。これが『幸

『幸福な死』第2部の副題である「意識的な死 La Mort consciente」へとその後つながっていくことも明らかであろう。

すぐに、世界の隅々にまで押し広げられ、我を忘れ、我からも忘れられて、僕はこの風となる。そして風の中で、あの列柱に、あのアーチ門に、熱の感じられるあの敷石に、人気のない町を囲む白い山々になるのだ。これまで一度として感じたことがなかったのは、かくも前面にあって、同時に生じた自分自身からの脱却と、世界を前に自らが存在しているという感覚なのだ。(PLI, p.112)

死について語らなければならないとしたら、このジェミラにおいてこそ、恐れと沈黙の狭間にあって、虚しい希望などもため死について確信するとはどういうことかについて正確に物語ることを、見つけることになるだろう。(p.113)

廃墟と死について描写と考察を行った「ジェミラの風」に対して、「ティパサでの婚礼」は、北アフリカにおける豊穡なる大自然と、若者のうちに漲る生の歓喜を歌いあげている。一方で、『幸福な死』第2部第4章において、メルソーはティパサの近くにあるシュヌーアに居を定めると、その地の大自然を全身で堪能し、一步一步、幸福の成就へと近づいていく。両者の間には明らかに共通するトーンが認められ、カミュがティパサを来訪する度に覚えていたさまざまな靈感や、「ティパサでの婚礼」の執筆体験は、自然世界との合一を通じての幸福の成就という『幸福な死』における根本的なテーマが形成される上で、重要な働きを果たしたと考えられるのである。また、明らかに「ティパサでの婚礼」のテキストを下敷きにしたと思われる表現も、『幸福な死』の中で見つけることができる。

「ティパサでの婚礼」(PLI, p.106)

どれほどの時を過ごしたことか、ニガヨモギを踏みしめ、遺跡を撫で回し、自分の呼吸を世界のざわめくような吐息と一致させることで！ 荒々しい香りに取り巻かれ、まどろんだ虫たちのコンサートに浸りきって、僕は目を見開き、暑さに満ちあふれた大空の耐えがたい壮麗なさまへ向けて心を開くのだ。

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, pp.1176-77)

そしてメルソーはニガヨモギの中で寝転び、熱を帯びた石に手を置いて、目を見開き、暑さに満ちあふれた大空の耐えがたい壮麗なさまへ向けて心を開くのであった。自らの血の拍動を、午後2時の陽光の激しい脈動に一致させ、荒々しい香りに取り巻かれ、まどろんだ虫たちのコンサートに浸りきって、メルソーが眺めている空は、白から澄んだ青へと移ろい、やがて大気が入れ替わって空は夕暮れの緑色となり、そのかぐわしさと優しさが、まだ熱を帯びた石造りの遺跡へと注がれるのであった。

『幸福な死』の執筆と発表の断念以降に執筆された「アルジェの夏」においては、地中海に面した地で生きる人々を一つの「種族」として捉え、とりわけ夏の海と陽光を存分に堪能する若者たちの姿が活写される。語り手によれば、彼らは超越的なものではなく自らの肉体＝存在そのものを信奉し、現在時に満足することで「生きること」を全面的に享受し、来世や不確かな未来に対する虚しい希望などは抱かない。それはまさに、後年の『異邦人』における青年メルソーが属している「種族」そのものと評することができるであろう。こうした内容は、『幸福な死』の作品世界とはむしろ

る隔たっているわけであるが、このエッセイの末尾で、『幸福な死』第2部第4章からの引用をカミュが行っている点に注目する必要がある。それは既に本稿の第3章第1節で見た、イナゴ豆の花が匂い立つという場面であり、当初は『カルネ』から『幸福な死』へと引用されていたが、再度エッセイの素材として用いられているのである。

『幸福な死』第2部第4章 (PLI, p.1187)

夏の終わりには、イナゴ豆の木々は、愛の匂いをアルジェリア全土に降り注ぐ。夕暮れや雨の後などは、まるで大地全体が、太陽に身を委ねた後、アーモンドの香りがする精液ですっかり濡れそぼったおなかを休ませているかのようだ。一日中、その匂いは巨大な木々から、重苦しく押さえつけるように降り注いでいたのだ。[...]メルソーは苦く、香り立つ匂いを激しく吸い込んだ。この匂いによって、この夕べ、彼と大地との婚礼が神聖なものとなるのであった。

「アルジェの夏」(PLI, p.126)

だがその同じ時期、イナゴ豆の木々は、愛の匂いをアルジェリア全土に降り注ぐ。夕暮れや雨の後などは、まるで大地全体が、夏の間中太陽に身を委ねたがために、アーモンドの香りがする精液ですっかり濡れそぼったおなかを休ませているかのようだ。そして今や、またもこの匂いによって、人間と大地との婚礼が神聖なものとなり、我々の内にこの世界において真に雄々しいただ一つの愛が浮かび上がってくるのだ。はかなくも、また高邁な愛が。

引用の内容よりも、このような引用が行われたという事実が、二つの重要な事柄を示しているのではないか。まず、『幸福な死』をエッセイの素材として用いたということは、もはやこの小説を独立した作品として発表することはないとカミュが思い定めたことを証している。かつて「貧しい地区の声」がまったく私的なテキストであったからこそ、その文章を全面的に「皮肉」の素材として使うことができたのと同じく。だがもう一方で、出版される『婚礼』のテキストにこっそりと『幸福な死』の一節を紛れ込ませたということは、この小説への捨てがたい愛着を作者が感じ続けていたということを雄弁に物語っているであろう。いわば「アルジェの夏」を通じて、『幸福な死』の世界のかけらが再生を果たしたのである。

『婚礼』の末尾を飾る「砂漠」は、1937年9月におけるイタリア旅行の体験を元にしたエッセイであり、前半はピサを、後半はフィレンツェとその郊外のフィエゾーレを訪れた体験が描かれている。また前半ではイタリアで触れた絵画などに関する美学的な考察が行われ、後半ではイタリアの風景に靈感を得て、「世界＝自然」と人間との関わりについての、初期のカミュを特徴付ける例のテーマがさらに推し進められている。「アルジェの夏」におけるのとは異なり、『幸福な死』から「砂漠」への直接の引用は行われていないが、次のようなパッセージには、メルソーが試みた自然への神秘的な没入を通じての幸福の探求というテーマが、明らかにこだまとして響き渡っている。

僕にはわかっていた。無数のまなこが、この風景をじっと見つめたのだ。僕にとって、それは空がはじめて微笑んでくれたようなものだった。この風景によって、言葉の深い意味において、僕は自分自身の外へと導かれていたのだ。それが確証してくれていたのは、僕の愛なくしては、あの美しき石の叫び声なくしては、なにもかもが虚しいということだった。世界は美しい。そして世界がなければ、いかなる救いもない。世界が辛抱強く教えてくれた大いなる真実というのは、精神など何ものでもなく、心もまた何もので

もないということだ。そして、日の光で暖められた石や、空が晴れたことで巨大になって見える糸杉によって切り取られる世界においてだけ、「それは正しい」ということばが意味を持つということなのだ。その世界とはつまり、人間のいない自然なのである。(PLI, p.135)

そして本稿第2章第3節ですで見たとおり、フィエゾーレにおいて味わった精神的な高揚感をカミュはまず『カルネ』の断章1-141として感動的に書き表してのち、その後半部を『幸福な死』第2部第2章の末尾に利用していたが、その直前の部分は使用していなかった。ところがその未使用部分を今度は「砂漠」の執筆に際して利用したのである「そして手と花々との一致、大地と、人間的なものから解放された人間との間の、愛にみちたこの了解、ああ、僕はそれに改宗してしまいたい。もしそれが既に僕の信仰となっていなかったのならば (PLI, p.133)」。こうして、エッセイ「砂漠」もまた、『幸福な死』との隠された関連性を秘めていたのである。

テキストの再利用という点では、よく知られているように、『異邦人』の第1部第2章において、主人公メルソーが同僚のエマニュエルと共に疾走するトラックを追いかけて荷台に飛び乗るシーンと、日曜日に部屋の窓から通りを眺めて一日を過ごすシーンの2つが、『幸福な死』第1部第2章のテキストを下敷きにしている。だがこの2つは単なるエピソードとしての利用に過ぎず、『幸福な死』と『異邦人』との間にテーマ上の関連があることを物語るものではない。ただし、「アルジェの夏」における引用と同様、『幸福な死』の発表を断念したからこそ、二箇所にわたってテキストを『異邦人』のために利用したわけである。

最後に、『幸福な死』のテキストが、ずっと年代が下って、意外な形で再利用されている点を指摘しておこう。それは小説『ペスト』においてなのである。その第4部第6章において、語り手でもある医師ベルナル・リウーが、オランにきた旅人でありながら共にペストと闘う同志となったジャン・タルーから、その半生と辿り着いた孤高の信念について打ち明け話を聞く。その後、「お互いの友情を確かめるために」タルーは禁を犯してオランの港で共に泳ぐことを提案し、二人は夜の海へと泳ぎ出る。そのシーンに、『幸福な死』第2部第5章において、自然との本質的な一体性を確かめるためにある夜メルソーが海へ入っていく部分のテキストが使用されているのである。

『幸福な死』第2部第5章 (PLI, pp.1188-90)

少し下の方に見える海は、ゆっくりと口笛の音を立てていた。月明かりにあふれたビロードのような姿を見せ、獣のように柔らかく滑らかに見えるのだ。[...] 岩に腰を下ろし、そのそのあばただらけの表面を指先に感じながら、月明かりに照らし出された海が静かに盛り上がっていくさまをメルソーは眺めていた。[...] メルソーは規則正しい動きで泳ぎながら、背中の筋肉によって動きのリズムが取られるのを感じていた。[...] 自分の後ろでは、足で水を打つ度に泡立ちが生まれ、と同時に水がひたひたという音を立て、この夜の孤独と沈黙に包まれて、異様なほどはっきりと聞こえるのであった。

『ペスト』第4部第6章 (PLI, p.212)

突堤の巨大な台座のところで、海はゆっくりと口笛の音を立てていた。二人が突堤によじ登っていくと、海はビロードでできているかのように分厚く、獣のように柔らかく滑らかな姿を見せた。[...] 岩のあばただらけの表面を指先に感じながら、リウーは不思議な幸福感に包まれていた。[...] リウーは規則正しい動きで泳いでいた。足で水を打つ度に泡立ちが自分の後ろで生まれ、水は腕に沿ってすり抜けると、それから脚にまとわりつくのであった。重く水がはねる音が聞こえて、タルーが飛び込んだのがわかった。[...] それから水を叩く音がますます明瞭になり、この夜の孤独と沈黙に包まれて、異様なほどはっきりと聞こえてきた。

『婚礼』の場合とは異なり、作品のテーマという観点からは『幸福な死』と『ペスト』とを関連づける要素は皆無に近い。また夜の海で泳ぐというシーンをまったく最初から書き起こすのも、作家としての習練を詰んだこの頃のカミュにとっては造作もないことだったのであろう。にもかかわらずあえて『幸福な死』から引用を行ったのは、かつてこの作品を苦勞して執筆したということの刻印をこっそりと『ペスト』の中に刻みつけたかったからではなかろうか。それほど、この失敗作に、いや失敗作であるからこそ、カミュは深い愛着を覚え続けていたのではなかろうか。

(第二部は、次号に掲載)